
居眠り剣士は女子高生

あやま隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居眠り剣士は女子高生

【Nコード】

N0458T

【作者名】

あやま隆

【あらすじ】

試験中に居眠りをしてしまった女子高生 来須美奈が目覚めたとき、そこには見たことの無い世界が広がっていた。そして、その世界の人々は、何故か彼女のことを”王国最強の剣士 クリステイーナ”と呼ぶのだった。

現実と異世界を行き来する女子高生の葛藤を描く異世界コメディ
I、になる予定……

美奈、草原に立つ

『2年6組 来須^{くるす} 美奈^{みな}』

名前だけ書き込んだ数学のテスト用紙。その前で美奈は唸っていた。

『問1 異なる3つの実数 a 、 b 、 c がある。 $abc = 27$ であり、 a 、 b 、 c の順で等比数列であるとき、 a 、 c 、 b の順で等差数列であれば 』

頭の中で問題を読み上げた美奈は、昨晚、テスト勉強もせずに寝てしまったことを後悔した。

ヤバイ、まるで意味が分からない……。等比数列ってなんだっただけ……？

頭の中がぐらくらし、美奈はひとまず問1を諦めて問2に目を移した。

『問2 xy 平面において、点 $P_n (n = 1, 2, 3, \dots)$ は放物線 $y = x^2$ 上にあり、直線 $P_n \cdot P_{n+1}$ の傾きが 』

まるで呪文。美奈はさらに問3、問4と問題を読み進めていったが、そのピンク色のシャープペンシルを持った手は凍りついたように動かなかった。

どうしよう……。何もわからない……

美奈は数学が大の苦手であった。故に、今日のテストもどうせ高得点は無理だろう、とはなから諦めてかかっており、昨晚は教科書を開くことなく床に就いた。しかし、それでもまだ50点は取れるだろうという自信はあった。前回の中間テストでも勉強せずに挑んだが、なんとか60点は取れていたからだ。だが、今回の期末テス

トの数学の問題は、そんな美奈の予想を遙かに上回る内容であった。ふと周りを見ると、美奈以外のクラスメートは机にしがみつくようにひたすら解答を書き込み続けていた。シャープペンの先がテスト用紙の上を走る音がやけに大きく聞こえた。

とにかく、分かるところだけでも書いておこう。

そう思い、美奈は再度問1から読み始めた。実数、 a 、 b 、 c ……等差数列……等比数列……。まるで異言語の呪文のように、美奈の頭の中を数学术語がぐるぐると回った。解法を授業で習ったような気がしたが、どうしても思い出せなかった。いつしか、美奈はその視界がぼんやりと霞んでいくように感じた。はっ、と我に帰り、美奈は目頭を押さえた。美奈は眠りかけていた。

危ない危ない。なんとか答案を埋めないと……えー、積が27だから……

しかし、考えれば考えるほど、その思考がぼやけてきた。またもその視界に霞がかかり、美奈はシャープペンを手に持ったまま、うつらうつらと船を漕ぎ始めた

「……してください。……目をお覚ましくだ……」

耳元で呼ぶ声がした。美奈ははっ、と目を開けた。

青空。

目を開けた美奈の瞳に飛び込んできたもの。それは青空だった。

あれ？ テストは？ ……青空？

美奈は夢心地のまま、その青空を見つめていた。白い雲がゆつくりと右から左へ流れていた。

「目をお覚ましく下さい！」

耳元ではつきりと呼ぶ声が聞こえ、美奈は我に帰った。

思わず飛び起きた。すると、目の前には果てしなく広がる緑の草原が広がっていた。美奈はその中で眠っていたのだ。

え？ テストは！？ 等比数列は！？

そんなものはもうどこにも無かった。辺り一面に草原が広がっており、遠くには黒い森や赤い山々が見えた。風が彼女の身体にゆっくりとそよいだ。

彼女はふと身体に感じる風に違和感を感じ、その視線を自分の身体に下ろした。そこには、彼女のへそがあつた。何かの例えではなく、まさにへそそのものである。彼女は自分のへそが視界に入ったことに戸惑い、あたふたと自身の身体をまさぐった。首にはなにやらじゃらじゃらとした装飾品。肩には甲冑。胸にも金属製の甲冑

とはいえ、その胸元はなぜか大きく開いており、まるで甲冑とは呼べないような代物だった。そして、腹部には何も装着しておらず、腰にはまた甲冑を纏っていた。だが、腰の甲冑もまた足の付け根までしか無いような小ささで、そこから膝上まではまた何も纏っておらず、膝から下には金属製のブーツを装着していた。まるで、ゲームの中の、やたら肌の露出の多い女戦士のような格好 　というか、そのものだった。

えっ！？ ちよつと、制服は？ 何であたし、こんな格好してるの？

胸元と腰と太股ふとももが露出したその服装に戸惑いを感じ、美奈は思わずその胸元を手で隠した。すると、耳元からまた声がした。

「おお、クリス様！ 目を覚まされましたか！？」

美奈が振り向くと、そこには灰色のローブをまとった老人が心配

そつに美奈を見つめていた。美奈がきよとん、とした顔で老人を見ると、老人は安堵した様子で、申し訳無さそうな顔をして続けた。

「ああ、良かった。マトンゴの胞子を受けたときはどうなるものかと……私がもう少し早く気付くべきだったのですが……」

「え、あの、誰……ですか？」

美奈は胸元を隠し、ゆっくり後ずさりながら、見知らぬ老人に問いかけた。すると老人はまた心配そうな表情をして答えた。

「クリスマス様！ 私です。お付きのヘモドロスでございます」

「へ、ヘモド……ス……？」

「ああ、いけない。まだ混乱しておいでの様ですな。いまレグルスめが薬草を取りに行つてますので、それまでご辛抱を……」

レグルス……誰だろう？ というか、ここはどこなんだろう……？ 学校、じゃないよね。まるで見たことの無い場所……

美奈は不安げに辺りを見渡した。そこにはやはり一面の平原と青空が広がっており、傍らにはヘモドロスと名乗る老人が心配そうな表情で平原の様子を見守っていた。

「おお、レグルスめが戻ってきましたぞー！」

老人が平原の彼方を見ながら声を上げた。美奈もそちらを見やると、その中に人影が動いたことに気付いた。

「レグルス！ クリス様がお目覚めになられたぞー！」

老人は草原の人影に叫んだ。すると、
「おお、クリスマス様！ ご無事でなによりー！」と人影から声が響いた。

程なくして、その男 レグルスは彼らの元に辿り着いた。

「クリスマス様、薬草を取ってまいりました。早速これを……」

レグルスはその手に持っていた土まみれの草を老人に手渡した。

外人？

彼を見た瞬間、美奈はそう心の中で呟いた。彼の目は青色で、ブルンドの髪をなびかせていた。そして彼は皮製の鎧を身につけ、その背には大きな弓と矢を背負っていた。その姿を見て、美奈は世界史の時間に教科書で見た古代ローマの石像を思い出していた。

「さあ、これでよく効く薬を作りますので、暫しお待ちください」
老人はレグルスから受け取った草を片手に美奈に語りかけ、傍らに置かれた大きな麻袋の中からすり鉢を取り出して、その草をこりこりとすり始めた。

レグルスが、笑顔で美奈に語りかけた。

「クリスマス様、本当に心配いたしました。ずいぶん長いこと気を失っておられましたので……」

美奈は慌ててレグルスに言った。

「え、ちょ、ちょっと待って下さい！　なんか、人違い、じゃないですか？　あたし、クリスマス様って人じゃないです！！」

すると、レグルスはきょとん、とした顔をし、そして笑い出した。
「どうされたのですか、クリスマス様。そんな冗談を言うなんて、らしくありません」

すると、老人がレグルスを諭した。

「いや、待たれよレグルス。クリスマス様はまだ魔物の毒で混乱しておいでなのだ」

レグルスはそれを聞いて、はっ、とした様子で、申し訳無さそうに美奈を見た。

「さ、左様でございましたか。お許しくださいクリスマス様……」

「いや、だから、クリスマス様じゃないってば！　あたしは来須くね！

来須 美奈っていうの!」

それを聞き、二人は驚いた様子で顔を見合わせた。

「これは、まずいな。ヘモドロス殿、早く薬を……!」

「わかっておる! しかし、気丈なクリス様がここまで取り乱されるとは……!」

ああ、どうしよう。なんか変なトコに来ちゃった感じだよ……。学校はどこだろ……? 今日中に家に帰れるのかな……?

不安のあまり、美奈は身震いした。まあ、その露出の多い服のせいもあったのだが。

それを見て、レグルスがそっと近づいてきた。彼はゆっくりと語りだした。

「どうぞ、お気を確かに、クリス様。貴方様は我らがカンパレア王国騎士団の筆頭騎士という立場であらせられます。貴方様がしっかりして頂かねば、オーガ討伐の任を果たすこともままなりません」

え、ちょっと、この外人、何か変なこと言い出したんですけど……? あたし、クリス様じゃないって言ってるのに……

混乱する美奈をよそに、なおもレグルスは話を続けた。"クリス様"の父親が代々王国の騎士団長を務めてきたことや、王国の各土地を襲う魔物たちのこと、そして、今回オーガと呼ばれる魔物を倒すために"クリス様"が自ら討伐の名乗りを上げたこと。さらに、レグルスは"クリス様"こそ王国最強の剣士であり、心から尊敬していると言った。レグルスの頬が少し赤らんだ。

しかし、それは当然美奈にはまるで関係の無い話であり、彼女は途中からうわのそらで空や山を見つめていた。それに気付いたのか、レグルスは深く溜息をついた。

そこに、老人がすり鉢を持って歩み寄った。

「さあ、薬が出来ましたぞ。クリス様、どうぞこれをお飲み下され。」

美奈はすり鉢を手渡された。中には、ねっとりとした、どす黒い、得体の知れないものが入っていた。

え？ これ、何？ こんな飲むの？

美奈は躊躇した。それを見たレグルスが、すかさずそのすり鉢を奪い取って老人に手渡した。

「ヘモドロス殿、これをクリス様に飲ませてくだされ！ クリス様、どうぞご無礼をお許してください！」

そう言っつて、レグルスは突然美奈の身体を抑えつけた。それを見るやいなや、老人がすり鉢の中身を美奈の口へと流し込んだ。美奈の口の中に、不快な生臭さと強烈な苦味が広がった

「に、苦にが……！！！！！」

思わず大声を出して、美奈は椅子から立ち上がった。

そこは、教室だった。

突然大声を出して立ち上がった美奈に、クラス中の生徒の視線が集まった。

「え、教室……？」

美奈は思わず自分の身体をまさぐった。いつもどおりの制服姿だった。

「どうした、来須？ お腹でも痛いのか？」
試験監督の教師が心配そうに声を掛けた。

「い、いえ、何でもありません」

美奈は、状況を理解して着席した。教室のあちこちからクスクス、と笑い声が漏れた。

それをかき消す様に、「あと30分だぞー」と教師が生徒たちに声を掛けた。

机の上には、自分の名前以外、何も書かれていない答案用紙が置かれていた。

夢、だったのかな？

美奈は頭をぼりぼり掻きながら、また問1から読み始めた。

口の中には、まだあの妙な薬の強烈な苦味が残っているような気がした。

その苦味のせいか、美奈の頭は非常に冴えていた。そのおかげで、美奈はなんとか”等比数列”の意味を思い出すことができた。

「レグルス……、レグルス！ 何をしておるか！？」

カンパレア王国の筆頭騎士、クリスティーナは自分の身体を抑えつけていた男を叱りつけた。

レグルスは、はっ、として、彼女を抑えつけたその手をどけた。

「も、申し訳ございません、クリス様！」

「……何だというのだ、全く！」

クリスティーナは憤慨した様子で立ち上がり、身体についた土埃をぱんぱん、と叩き落とした。

へモドロスが慌てて説明した。

「いえ、クリス様、ご無事で何よりです。なにせ、先ほどまで正

気を失っておいででしたもので、私どもでなんとかクリス様を抑えようと必死で……」

「……そうか、それはすまなかったな、ヘモドロス。雑魚の魔物相手に不覚を取った私の落ち度だ」

「なんと、恐れ多いお言葉……。時に、クリス様……」

ヘモドロスは、クリスティーナが右手に持っていた小さな物体を指差した。

「さきほどからその手に持っている、それは一体なんでありましょうか？」

「……うん？」

クリスティーナは、何故か右手に持っていたそれを、いぶかしげに見つめた。その物体のあちこちを触って見ると、カチ、カチ、と音がして、その先端から細長い黒色の物体が出てきた。

「見たことの無いものだな……。噂に聞く、フェアリー精霊たちの道具であるるか……？」

クリスティーナは、それをヘモドロスに手渡し、麻袋に入れるように命じた。ヘモドロスはそれに従い、それを袋に入れた。その物体は、ピンク色のシャープペンシルは、麻袋の中で他の道具にまみれ、ころころと転がった。

美奈、草原に立つ（後書き）

なんとなく思いついたので書いてみました。

元々短編のつもりでしたが、この設定でいろいろ膨らませてみたくなったので連載ってことにしときます。

次回は未定。不定期に連載です。

面白かったら、是非ご意見・ご感想をお寄せください。

美奈、小鬼と出会う

美奈は家のベッドで熱にうなされていた。

「ここにお薬置いておくから、ちゃんと飲みなさいね」

スーツ姿の美奈の母親は、その枕元に風邪薬と水の入った白いコップを置いた。

「じゃあ、お母さん、お仕事行ってくるけど、午前中で終わらせて帰ってくるからね。午後からお医者さんに連れてってあげるから」
そう言い残し、美奈の母親はいそいそと部屋から出て行った。階段をばたばたと下りる音がした後、階下から玄関の扉を開け閉める音に続き、がちやり、と鍵を閉める音がした。一転して美奈の家の中は静寂に包まれた。

お薬、飲まないと……。

美奈は熱で意識がもうろうとする中、布団の中から手を伸ばし、頭の上の棚に置かれた薬を取ろうとした。そのとき、不意に美奈の意識が飛んだ。目の前が真っ暗になった

「チチチ……」と、鳥の鳴く声が聞こえた。

その声に気が付き、美奈はゆっくりと目を開けた。暗い空間の中に、わずかに日が差し込んでいるのが見えた。そこは部屋の中にしては、やけに暗く、ひんやりとしていた。その空間の片隅から、ぴちゅん、ぴちゅんと水が滴り落ちる音が聞こえた。

「ここは、どこだろう……？」

美奈はぼんやりとした意識のまま、ゆっくりとその身体を起こし

た。その額から、水に濡れた布がぼとりと落ちた。辺りを見渡すと、そこはまるで洞穴のような空間だった。彼女が寝ていた場所には動物の毛皮が敷かれており、その身体には大きめの白い布が掛けられていた。傍らには、大きな麻袋が置かれており、またその脇では脱ぎ捨てられた甲冑と大きな剣が静かに光っていた。

美奈は、妙に風通しの良いことを不思議に思い、自分の身体に掛けられている布の中を覗いた。そこには、彼女の白い肌が見えた。なんと、彼女はショーツ以外、何も身につけていなかった。

えっ！？ 下着だけ？ 何で！？ パジャマはどこいったの！？

一気に目が覚めた。美奈はうるたえ、片手で胸を隠しながら周りに服はないかと探したが、その空間にあるもので身に付けられそうなものは甲冑しか無かった。当然、美奈にはそれを身に付ける方法は分からなかった。仕方なく、美奈は自分の身体に掛けられていた白い布を身体に巻きつけた。それでも胸元から膝上までを覆うくらいの丈しか無かったが、無いよりは幾分かマシだった。

ようやく彼女がその姿を整えたとき、またも「チチチ……」と、鳥の鳴く声が聞こえた。美奈はその声に誘われ、おずおずと洞穴の外へ歩み出た。

そこには、視界を覆い尽くすほどの木々が並んでいた。その青く茂る葉に閉ざされた世界は闇に覆われているものの、わずかに差し込む木漏れ日きらきらと輝いて、いくつもの光の線を作っていた。時折風が吹くと木々はざわざわと音を立て、その中に小鳥のさえずりが響いていた。彼女はその光景に見とれつつも、足元にある巨大な木の根に気が付いた。

ふと背後を見ると、そこには巨大な木が立っていた。先ほどまで彼女が寝ていた空間は、その木の中に開いた洞穴だった。美奈はぼ

かんと口を開けたまま後ずさり、その木を見上げた。

「大きい木……屋久杉、つてやつかな？」

美奈は、以前テレビか何かで屋久杉を見た記憶があったが、今、目の前にあるこの大木はそれよりも遥かに大きいものであるように感じた。ぼーっとその大木を見つめる美奈に、背後から声を掛ける者が現れた。

「おや、クリス様、もうお加減はよろしいので？」

突然話しかけられ、美奈は飛び上がった。

ばくばくと鳴る心臓を押さえながら振り向くと、そこには一人の老人が立っていた。灰色のローブを纏うその老人に、美奈は見覚えがあった。

この人、どこかで会ったような気がする……。どこだったかな……？

不審げな顔をする美奈をよそに、老人は安堵の表情で話を続けた。「いや、先日立ち寄った村で、流行り病をもらってしまつとは不運でしたな。しかし、お加減が良くなつたようで安心いたしましたぞ」

その老人の声と口調で、美奈はそれが何者かを思い出した。

そうだ、こないだ見た夢の中に出てきた人だ……！

美奈は記憶を探り、その名を呼んだ。

「……あ！へ、へモントス、……だっけ!？」

「へモドロス、でございます、クリス様。……どうやらまだ具合はよろしくないようですな」

一旦は安堵の表情を見せた老人であったが、美奈の言葉を聞くやその顔が曇った。さらに老人は美奈のあられもない格好に気付くと、なんとまあ、といった風に、顔に手を当てて溜息をついた。

一方、美奈は、またもこの世界に訪れてしまったことに不平を漏らしていた。

「……またこの夢？ ちょっと勘弁してよ。見るならもっとステキな夢があるんじゃない!?」

腕を組んでぶつぶつと呟く美奈の様子を見て、老人は浮かぬ顔のまま、洞穴に戻るよう促した。

「ささ、クリス様。まだお休みになられたほうがよさそうです。じきにレグルスが獲物を捕らえてまいりましょう。食事が出来たらお呼びに参りますので、さあ!」

老人の語尾が少し強まった。それを聞き、美奈は前回同様に弁明した。

「え、いや、あたし、クリス様じゃないってば! 前にも言ったけど、来須くす! く・る・す、み・な!」

分かりやすく丁寧に自分の名前を言った美奈だったが、老人はそれを聞き入れる様子も無く、はあ、と溜息をついた。そして呆れた様子で言った。

「……クリス様、まだ熱でうなされているご様子ですな。レグルスが戻ったら、すぐに薬草を取りに行かせますので、どうぞ中でお休みくださいませ」

それを聞いて、美奈は戸惑った。

薬草? って、前回飲まされた、あの黒くて苦いやつ?

あんなものを二度も飲まされてはたまらない、とばかりに、美奈は慌てて手を振った。

「え、えと、薬は遠慮しときます! 午後からお母さんがお医者

さんに連れてつてくれるし……」

「クリス様、お気を確かに。母君はここにはおりませぬぞ。今頃はカンパレアで貴方様の帰りをお待ちになられております。母君を想う気持ちは分かりますが、今はオーガ討伐こそ最優先でございますぞ！」

老人は強い口調で美奈を諭した。そして森の中を見ながら不安げに呟いた。

「ああ、やはり薬が必要じゃ。レグルスのやつ、早く帰ってこないものか……」

それを聞き、美奈はひどく狼狽した。

ヤ、ヤバい！ これじゃ確実にまたあの苦いのを飲まされちゃう……！

どうしよう、どうすればいいかな……！？

そうだ、この人、きつとあたしが”クリス様”っぽくないから薬を飲ませようとしてるのかな！？

そう思いつき、美奈はそれを実行に移した。目を閉じ、えへん、と胸を張って口を開いた。

「え、えーと、わ、我輩は”クリス様”じゃー！ 何も心配はいらんぞよ、ヘドモンス！」

老人はまたも深い溜息を吐き、呆れた口調で答えた。

「……ヘドモロス、でございます。クリス様」

また名前を間違えたことにあたふたし、美奈は慌てて取り繕った。

「え、えー、ヘドロンモス！ その、薬はいらんぞよー！ このとおり、拙者は元気じゃ、アハハハハ！」

美奈の乾いた笑い声がむなしく響き渡った。老人は、暫し頭を抱えてうつむいた後、ゆっくりと話し出した。

「……クリス様、薬が苦手なことはよく分かりました。しかし、貴方様はカンパレアの筆頭騎士というお立場。今日のことはヘド

口スの心のうちに仕舞っておきますので、どうぞ今は中でお休みください。薬もなるべく早く用意いたしますゆえ……」

呆れるあまり、がっくりと肩を落しながらそう語る老人を見て、美奈は後悔した。

ま、まずい……なんか逆効果だったみたい……。

老人はじりじりと美奈に近づき、なんとしてでも彼女を洞穴に入れようとしていた。それを見た美奈は、思わず脱兎のごとく駆け出した。

逃げちゃえ！

その行動に驚き、老人は思わず大声を上げた。

「あ、お待ちくださいクリス様！ 剣も甲冑も持たずにどちらへ行かれるのですか!？」

しかし、美奈は聞く耳も持たず、ただひたすらに森の中を駆け抜けた。その身に纏った白い布の端が彼女の背中ではらひらとなびいた。背後から呼び止める声が響いていた。

「お待ちを！ 森の中は危険でございます！ どうぞお戻りを！」

いつしか背後から響いていた老人の声も聞こえなくなり、美奈はふと立ち止まった。すると、森の中に小さな影が見えた。バスケットボールほどの大きさの小さな生き物が、木の根元でこちらに背中を向けてしゃがんでいた。その生き物は美奈の存在に気付かず、一心不乱に木の根元を掘り続けているようだった。美奈は見たことも無いその生き物に興味を持ち、ゆっくりとその背後から近づいた。それは全身が茶色で、四本の手足があり、皮製の小さな服を身につけていた。頭に付いた耳はぴん、と尖っており、それは地面を

掘るたびにピコピコと可愛らしく動いていた。後ろから見るとそれは家の近所で見ると小さな犬のような風貌であった。

子犬かな？ いや、子犬にしては、なんか違うような……？
なんだろ？

ゆっくりと近づくと美奈だったが、その足元で、ぱき、と枯れ枝を踏む音がした。それに気付いて、生き物は後ろを振り返った。それを見て、美奈は仰天した。まるで、悪魔のような顔。その細い目は血のように赤く、歯は鋭く尖り、鼻はそぎ落とされたかのように平坦だった。その右手には研ぎ澄まされた小さな短剣を持っており、木の根元から掘り出した昆虫をがりがりか齧っていた。

「やだ、なにこれ、キモい！」

美奈は思わず悲鳴を上げた。その生き物も美奈が突然視界に入ったことに驚いた様子で、手にした短剣を振り上げて叫び声を上げた。

「ギギギ……！」

そしてその生き物 この世界では小鬼ゴブリンと呼ばれているのだが

は、短剣を片手に美奈に

飛び掛った。美奈は慌てて身をかわしたが、小鬼はその身に纏った白い布の端にしがみついていた。そしてその布を、何度も何度も短剣で突き刺した。布がびりびりと破れる音がした。

「ちよつと、何！？ うわ、やめて！」

なんとか小鬼を振り落とそうと布の端を振り回したり、飛んだり跳ねたりを繰り返す美奈だったが、小鬼は依然としてその白い布にしがみついて離さなかった。そこへ、息も切れ切れになった老人が駆けつけた。

「やや、あれはゴブリン！ これはいかん！ クリス様、魔法を使います！ どうぞお下がりでください！」

そんな老人の声も混乱した美奈には届かず、美奈はただ悲鳴を上

げながら白い布にまとわり付いた妙な生き物を引き離そうと暴れていた。

「やだ！ やだ！ ちょーキモいんだけど、コレ！ 離れてよ！」
それを見た老人は、もはや一刻の猶予もならん、と意を決してなにやら呪文を唱えだした。

「クリスマス様、避けてくだされ！ 炎の精イーフリートよ、我に力を貸したまえ！」 フレア”ー！！”

そう老人が叫ぶと、彼の手から巨大な火の玉が飛び出した。そして、それはそのまま美奈の白い布にまとわりつく小鬼の元へと飛んでいった。すると、ごおん！ という爆音と共に、美奈の目の前が真っ赤な炎に包まれた

優しい声が響いていた。

「美奈……美奈……起きなさい……」

その声に起こされ、美奈は目を開いた。美奈の母親の顔がそこにあった。それを見て、美奈は呟いた。

「お母さん……？」

母親の顔を見て、美奈は心からほっとした。母親はいそいそと美奈の服を用意していた。

「さあ、美奈、お医者さんにいくわよ。気分はどう？ 起きても大丈夫？」

夢だった。よかった……。

先ほど見た小鬼の顔が脳裏をよぎったが、それもすぐに忘れた。

美奈は母親の問いに答えた。眠る前まで熱にうなされていたのが嘘のように、気分はすっかり良くなっていた。

「うん、なんだかさつきより良くなったみたい」

「それは良かったわ。お薬が効いたのね。でも念のためにお医者さんにも診てもらいましょう」

起き上がろうとした美奈だったが、ふと気になって布団の中を覗き込んだ。

当然、そこにはショーツ姿ではなく、パジャマを纏った自分の身体があり、彼女はもう一度安堵した。

カンパレア王国の筆頭騎士、クリスティーナが目を開けるとそこには黒く焼け焦げたゴブリンの死体があった。纏っている白い布の端がわずかに焦げ、身体のうちこちに黒いすが付いていた。それは、彼女の目の前で炎魔法が使われたことを物語っていた。

へモドロスが、心配そうに彼女に駆け寄ってきた。

「クリス様！ ご無事ですか!？」

クリスティーナはそれを一喝した。

「へモドロス！ どういうつもりだ、こんな至近距離で炎魔法を使うなどと!!」

へモドロスは、驚いた顔つきでクリスティーナを見た。

「はっ!？ 申し訳ございません、クリス様。しかし、また取り乱されていらしたようでしたので……」

「……む？ そうか？ そういえば木の洞穴の中で休んでいたはずだが、いつの間か外に出ておるな」

辺りを見渡したクリスティーナは、ふと自らの格好に気が付いた。「な、なんだ、この、はしたない格好は……!？ どうやら熱にうなされて、また見苦しいところを見せてしまったようだな。すまんなが、このことは他言無用に頼む、へモドロス……」

「い、いえ、そんな恐れ多い……それより、もうお加減はよろしいので？」

「うむ。先ほどよりは随分とすっきりとした気分だ……。食事を摂ったらすぐに発つぞ。オーガの巣も近づいておる」

そう毅然とした態度で語り、クリスティーナは元いた木の洞穴へと向かった。

「これは……？」

クリスティーナは洞穴内で甲冑の横に転がっている物体を見つけ、手を伸ばした。そしてそれを左手でコンコンと叩きながら、しげしげと興味深そうに見つめた。

「軽く、そして丈夫そうだ……なんとも不思議な素材でできた器だな。先日手に入れた妖精の道具フェアリーと手触りが似ている……。これも持ち帰って学者に調べさせてみるか」

そう呟き、クリスティーナはその物体　白いプラスチック製のコップを麻袋へ入れた。コップの横には、銀色の小袋　『パフロンA』と表記された風邪薬も落ちていたのだが、クリスティーナはそれには気付かないまま洞穴を後にした。そして誰も居なくなつた洞穴の中で、その風邪薬の小袋は静かに光っていた。

美奈、小鬼と出会う（後書き）

また思いついたので書きました。

なお、”ヘモドロス”という名前は、初回にかなり適当に付けた
ものです。それがまさかここまで美奈を苦しめることになると思
いもありませんでした。

美奈、巨人と戦う

「るー、らる、受身、尊敬、可能、自発……」

中世以前の日本人が創り出した言語。それがどこか遠くで響いていた。

「推量……、むー、べし、らむ、けむ、まし、たし、めり、らし」

それはまるでどこか異国の音楽のように教室の中に淡々と、そしてゆっくりと流れ、彼女を眠りの世界へ誘う。まるでその上に重りを乗せられたかのように、美奈の頭はこくりこくりとリズムを刻んでいた。いつしか彼女の意識はふわふわと浮かび、まるで雲の上で寝ているような、そんな錯覚にとらわれた

「……様、…リスさ……、クリス……」

どこからか呼ぶ声がした。どこかで聞いた声

「クリス様!!」

強く呼ぶ声が響いた。美奈は、はっと目を開けた。気がつくくと、美奈は大きな鍾乳洞の中にいた。

彼女を呼ぶ声は、さらに大きくなった。

「クリス様！ 早く！ 早く剣を!!」

え？ ……剣？

美奈はふと気配を感じて顔を上げた。すると、そこには

巨人。

巨人が立ち、低い唸り声をあげながら美奈を見下ろしていた。その身長は人間の五、六倍はあるだろうか。肌は緑色で、ふくらんだ腹。大きな頭には髪一本生えておらず、目は赤く爛々と光り、口元には巨大な牙が見えた。一方で両腕には見るも逞しい筋肉が盛りあがり、その右手には電柱ほどの大きさの石の棍棒を手にしていた。突然目の前に現れた怪物に、美奈は目を丸くした。そして、思わず悲鳴を上げた。

巨人は美奈の悲鳴に驚いたようだった。すると、一瞬怯んだ巨人の肩口に、空を切る音と共に一本の矢が突き刺さった。巨人は苦悶の表情を浮かべて一歩後ずさった。

その隙に、一人の男が美奈と巨人の間に立ちふさがった。

「ヘモドロス殿！ 私がやつらの注意を引きましょう！ その間にクリス様を！」

皮の鎧を身に纏い、大きな弓を持ったその男　レグルスが叫んだ。

巨人は呻き声と共に肩口の矢を引き抜き、その場に投げ捨てた。そしてレグルスを睨むと、低く重々しい叫び声と共に、彼に向かつて巨大な棍棒を振り下ろした。レグルスはそれをひらりとかわし、巨人の身体へ向けて再度矢を放った。矢は巨人の腹に刺さったが、巨人はまるで煩わしいとげを抜くようにそれを摘んで引き抜いた。この一撃で巨人の興味は完全にレグルスに移ったようで、逃げるレグルスを追って洞窟の奥へと歩いていった。

巨人が立ち去ったのを見て、洞窟の隅に身を潜めていた老人がかさず美奈の下へ駆け寄った。灰色のローブを纏ったその老人に会うのはこれで三度目だった。美奈は見知った顔を見て少しほっとした。

「あ、ヘモロゴス……！」

「……ヘモドロス、でございます！ クリス様、もしやまた取り乱しに！？」

老人は軽く溜息を吐いたが、すぐに慌てて美奈に兜を被せた。突然頭に重いものを乗せられ、美奈は軽く抵抗した。

「や！ 何これ！？」

「先ほどオーガの不意打ちで飛ばされた兜でございます！ お忘れですか、貴方様はあの棍棒を頭に受けられたのですぞ！ この兜が無ければ、きっと今頃は……」

「えっ！？ 先ほどって、何それ？ あたし、さっきまで古文の授業受けてたはずなんです……」

「コ、コブ……？ コブなど気にしている場合では御座いませぬ！」

美奈の兜の紐をきゅつと締め、老人は傍らに落ちていた大きな剣を美奈に差し出した。その銀色の剣は、薄暗い洞窟の中でも白く鋭い光を放っており、不思議な力を感じさせた。それを見た美奈はまた戸惑った。

「え……？ 何？ これ……？」

「クリス様、早くこの剣を！ レグルスも長くは持ちませぬ！
これであるオーガを仕留めるのです！」

老人は剣の柄を美奈に向け、ぐいと突き出した。美奈はうろたえ、両手をぶんぶん振った。

「む、無理無理無理！ あたし、ただの女子高生だよ！？ あんなでっかいの倒せるわけないし、そんな危なっかしいもの持てないよー！」

老人は目を丸くした。

「ジヨ、ジヨシコーサー？ ああ、なんということか。まだ混乱しておいでなのですか！」

その時、洞窟の奥からずしんと重く響く音がした。レグルスが慌てた表情でこちらへ走ってきた。

「ヘモドロス殿、もう矢が残りわずかです！ これ以上は食い止められませぬ。クリス様はご無事ですか！？」

それを聞いて、老人は急いだ様子で美奈に剣を差し出した。

「クリス様、早く剣を！」

美奈は首を振ってそれをかたくなに拒んだ。

「む、無理だよ！ あたし、剣道部でもないし、こんなの持ったこともないし……」

その時、洞窟の奥から巨人がぬつと姿を現した。その身体には矢が二、三本刺さっており、その目は怒りに満ちていた。それを見た美奈は恐怖で背筋が凍りついた。美奈は口元を震わせながら老人に提案した。

「そ、そうだ、ヘモンロス、あたしの代わりにそれ使つてあいつ倒してきてよ、ね？ ね？」

「ヘモドロス、でございます。ああ、クリス様、早く正気を取り戻してください！」

老人はなおもその剣を美奈に渡そうとし続けた。美奈は徐々に近づいてくる巨人に怯えながらも、それを拒み続けた。

「ねえ、そんな剣、あたし要らないよ！ それ使つて早くあの怪物やつつけてきてよ！」

老人もまた背後から近づく巨人への恐怖に駆られていたが、それでもなお主君が正気を取り戻すことを信じ、冷静に語った。

「クリス様、落ち着いてください。それは私にはできません。王より賜ったこの聖剣は、クリス様のみ振るうことが許されたもので

「ごじます」

それを聞いて、美奈は目を潤ませた。両手がぶるぶると震えた。

「そんな、だって、無理、無理だってば……あたし、クリス様じゃないし……」

今にも泣き出しそうな表情の美奈を見て、老人は頭を振り、剣をそつと地面に置いた。

一方、レグルスは巨人の棍棒を必死で避け続けていた。彼は老人へ呼びかけた。

「ヘモドロス殿！ クリス様は！？」

「まだ正気を取り戻されておらぬ！ ここは二人で食い止めようぞ！」

老人は両手を巨人にかざし、ぶつぶつと呪文を唱え始めた。そして、その目をかつと見開いて叫んだ。

「炎の精イーフリートよ、我に力を！ フレアー！」

その言葉と共に、老人の手から巨大な火の玉が飛び出した。火の玉は巨人目掛けて飛び掛り、巨人の頭は炎に包まれた。だが、その炎は巨人の皮を軽く炙っただけにとどまり、巨人は顔の前で左手をぶんぶんと振って、顔にまわりつく黒煙をはいた。その様子を見て、老人は驚きを隠せなかった。

「なんと、魔法が効いておらぬ！」

巨人は老人を睨みつけ、棍棒を振り下ろした。すかさずレグルスが老人を抱きかかえ、その場から逃れた。

「ヘモドロス殿は物影に隠れていてください！ じきにクリス様が正気に戻られます！」

その言葉に従い、老人はあたふたと洞窟の片隅に身を潜めた。レグルスは巨人の顔めがけて矢を放ち、またもその注意を自身に向け始めた。

美奈は、巨大な火の玉すらものともしない怪物に声を失っていた。

しかし、それでもなお巨人と対峙するレグルスを感嘆の思いで見続
けていた。

あの外人のひと、あんな怪物と向き合って怖くないのかな…
…。

そのとき、ふと美奈の頭にある考えが浮かんだ。それは、彼女に
とってはまさに名案と呼べるものだった。

そうだ、あのレグルスとかいう人にこの剣を使ってもらおう
！ それしかない！

そして、美奈は傍らに置かれた剣を手に取った。だが、それはず
しりと重く、片手では持ち上がらなかった。そこで美奈は柄を両手
で持ち、そのまま巨人とレグルスの元へ駆け出した。

その様子を見ていた老人が、目に涙を浮かべて歓喜の叫びをあげ
た。

「おお、見よ、レグルスよ！ クリス様が剣を手に取られた！
クリス様が元に戻られたぞ！」

それを聞いて、レグルスも美奈の姿を見た。そこには、聖剣を手
に雄雄しくこちらへ向かってくる騎士の姿があった。

「おお！ 待ちわびましたぞ、クリス様！！」

だが、美奈の向かう先は、巨人ではなくレグルスであった。そん
なことも露知らず、二人は歓喜に沸いた。美奈は、巨人から可能な
限り距離をとりつつ、必死の思いでレグルスの元へ走った。

お願い、どうか、この剣を受け取って……！！

しかし、その思いを打ち消すように、老人の指示が飛んだ。

「レグルス！ お前はクリス様と共にやつを挟み撃ちにするのだ
！！」

「うむ、それは良い作戦であります！」

その指示に従い、レグルスは美奈と自分の間に常に巨人が来るように動いた。美奈から見ると、どれだけ彼女が動いても彼の姿は巨人の向こう側にあることになる。いつしか、美奈とレグルスは巨人を中心にした円のちょうど反対側に位置するようになった。

ちょ、ちよつと！？ 何故かあの外人があたしを避けるように動いてるっぽいんだけど！

美奈は思わぬ展開にうろたえた。

一方、巨人は美奈とレグルスが自分の周囲をぐるぐると回りだしたことに戸惑い、どちらを標的にするべきか決めかねている様子だった。それに気付いた美奈は、その足を止めて一考した。

あの外人、ずっとあの巨人の後ろに隠れてるなあ……まいったなあ……。でも、さつきからあの巨人、一度もあの棍棒を振り回してない気がするな……。なんかずっとおろおろして、あまり動きも素早そうじゃないし……。

そこで、美奈は意を決した。

こうなつたら仕方ない……。怖いけど、あの怪物の足元をすり抜けて一直線にあの外人のひとに剣を手渡そう！ そしたら、あたしはヘモドンズと一緒に隠れて、外人のひとがああ怪物をやっつける！ それで万事解決！ よーし！！

美奈は巨人の視線がレグルスに向いた瞬間を見計らい、思い切つて前へ走り出した。巨人は美奈の動きに気付いておらず、美奈は祈

る思いで一氣にその足元に駆け寄った。

ここさえ抜ければ、あの外人のところに辿り着く！ こっちに気付かないでよ、怪物ー！！

しかし、その瞬間、それを見ていた老人がまたも歡喜の叫びをあげた。

「おお！ クリス様が一瞬にしてやつの間合いに！！」

その声に気付き、巨人が美奈の方を振り向いた。美奈と巨人の目が合い、美奈の身体が固まった。突然足元に現れた美奈に対し、巨人は低い雄叫びをあげた。美奈の額から冷や汗が流れた。

え？ 嘘！？ ちょ、あたし、あんたと戦う気とか無いってば！ ヘモロドス、余計なこと言わないでよー！！

巨人が棍棒を振り下ろした。美奈は慌ててそれをかわした。先ほどまで美奈が立っていた地面の岩が、音を立てて砕け散った。それを見て、美奈は思わず悲鳴をあげた。

「ひゃー！！！！！！」

なんとも情けない声をあげながら、美奈は巨人の足元から離れようとした。しかし、巨人はそうはさせじと続けざまに棍棒を繰り出した。美奈はそれもすんでのところであわした。棍棒が地面に当たる度に激しい音と振動が感じられ、美奈は恐怖に震えて声も出せなくなつた。

その後もさらに巨人の攻撃は続いた。しかし、巨人の攻撃は一度も美奈に当たらなかつた。何故か彼女には巨人が棍棒を振り下ろす動作が手に取るように分かり、それをかわすための動きも即座に判断できた。その身体の真の持ち主 クリスティーナの身体能力と

戦闘経験がそれを可能にしていたのだが、美奈はそんなことなど知る由もなかった。

「なんと、クリス様はやつの攻撃を完璧に見切っておる！」

老人が感嘆の声をあげた。

「しかし、避けているだけでは勝機がありません！ 見れば、剣を構えることもままならぬご様子！ ヘモドロス殿、助太刀をするべきでは！？」

「いや、それならば助けを呼ばれるはず！ きつと何か考えがあつてのことなのだ！」

心配するレグルスを諭すように老人が言った。二人は固唾を飲んで美奈の様子を見守った。

一方、美奈は巨人の棍棒をただひたすらかわし続けていた。両手に剣を持つてはいたが、それはあくまでもレグルスに手渡すためのものと考えていたので、それで斬りかかることなど思いもしていなかった。巨人は何度も棍棒を振り下ろすも、全く当たらない状況に次第に焦れてきているようで、段々とその腕に力が入ってきているようだった。

な、何であたしが狙われてるのー！ー！？ 誰か助けてー！

！！！！！

泣きそうな表情で、美奈は攻撃を避け続けた。そして巨人の攻撃がいよいよ大振りになり、棍棒を振り下ろした際の地面の砕け方が激しくなってきた。激しい振動と共に砕け散った岩の破片が顔に当たり、美奈はいよいよ心底震え上がった。

そして、いつしか美奈は洞窟の壁際へと追いやられていたことに気付いた。

あれ、もう逃げ場がない！ どうしよう……！

美奈を追い詰めた巨人はせえせえと息を上げながらも、にやりと口元に笑みを浮かべた。そして、両手で棍棒を持ち、思い切りそれを振り上げた。

それを見たレグルスが、慌てて弓を構えた。

「いかん、ヘモドロス殿！ クリス様が……！」

その時、老人は地面から伝わる音と振動に気が付いた。そして、天井を見上げてある事実に気が付いた。

「いや、待てレグルス！ これは……！」

巨人が力の限り棍棒を振り下ろそうとした瞬間、その足元でひときわ大きな地鳴りが響いた。

地鳴りは徐々に周囲へ広がり、そして、天井からは、ごおん、と一段大きな音が響き渡った。巨人はその音に驚き、棍棒を振り下ろす手を止めて辺りを不安げに見渡した。

美奈はそれを見て、慌てて巨人の足元から逃げ出した。地鳴りはどんどん大きくなり、いつしか天井からは砂がぱらぱらと落ち始めていた。

「うお！？ これはいかん！ 落盤が起こるぞ！」

老人が叫び声をあげた。老人とレグルスは洞窟の出口へ向かって走り出した。

「クリス様！ 天井が落ちます！ 早くお逃げを……！」

それを聞いて、美奈も二人の後を追って走った。

その時、不意に天井が崩れた。美奈のすぐ背後に巨大な岩が落ち、土埃が舞った。

「きゃーーーーー!?!?」

美奈は突然のことに悲鳴をあげ、必死で走った。地鳴りはなおも

止むことなく、背後に響く音で美奈はそこに次々と巨大な岩石が落ちていくことを悟った。いつしか視界は土煙で遮られて二人の背中は見えなくなつたが、それでも老人が呼ぶ声を頼りに美奈は全速力で洞窟を駆け抜けた。そして、背後からはひととき大きな岩石の落下音と共に、怪物の断末魔が響いた

美奈は悲鳴と共に椅子から転げ落ちた。

ノートと教科書が机の上からはさばさと落ち、筆箱の中身が床に散らばった。

周りを見ると、クラスメートが驚いた表情でこちらを見ていた。一瞬、呆然とした美奈だったがすぐに状況を理解し、あせあせと散らばったペンをかき集めた。

「どうした、来須。怖い夢でも見たか？」

古文の教師が意地悪く言った。教室の中が笑い声で包まれた。

「す、すみません……」

美奈は冷や汗をかきながら、拾い上げた教科書を机の上に置き、ぱらぱらとページをめくった。

「じゃあ、来須、眠気覚ました。このページの三行目から読んでみる」

教師が笑みを浮かべて美奈を指差した。

”オーガの巢”と呼ばれる巨大な鍾乳洞の中。その洞窟の主は、突然落ちてきた巨大な岩に押しつぶされてその身体を横たえて

いた。瓦礫の隙間から垣間見えるその手足はぴくりとも動かず、まだ天井からわずかに落ちてくる小石が、からからと音を立ててその瓦礫の山を降っていった。

「これを、本当に私が……？」

カンパレア王国の筆頭騎士クリスティーナは瓦礫の山とそこに埋もれたオーガの死体を見て、驚きを隠せない表情で呟いた。ヘモドロスが傍らに膝をついて答えた。

「左様でございます。実に勇敢な戦いぶり……！そしてあの醜いオーガの攻撃を誘い、洞窟の落盤に巻き込むという見事な作戦……このヘモドロス、実に感服いたしましたぞ！」

それを聞き、クリスティーナは頭を抱えてうつむいた。

「すまぬ。まったく記憶に無いのだ……」

「なんと……！？」

ヘモドロスは耳を疑った。クリスティーナは唇を噛み、そして続けた。

「無我夢中だったのかもしれない……だが、常に力任せで戦ってきた私に、このような芸当ができたろうか……？ どうも、これは私一人の力で勝ち取ったものではないような気がするのだ……」

勇敢にオーガに立ち向かっていく彼女の姿を見ていたヘモドロスとレグルスは、信じられない、といった表情で顔を見合わせた。しかしすぐに二人は、これは彼女なりの謙遜に違いないと考え、その奥ゆかしさに改めて尊敬の念を抱いた。

そこで、感嘆の表情で彼女の横顔を見ていたヘモドロスは、ふと違和感を感じた。

「おや？ クリス様、右耳のイヤリングはどうされましたかな？」

「……ん？」

クリスティーナは右の耳たぶをそっと触った。そこにあったはずの銀のイヤリングが無くなっていた。

「……無いな。戦いの最中で落としたのだろうか。王からの賜り物だったのだが……」

それを聞いたレグルスが即座に申し出た。

「探してまいりますよ！」

瓦礫の山へ向かおうとしたレグルスを、クリスティーナは制止した。

「……よい！ 恐らく見つからぬだろう。それに、あれは勝利の女神ウイクトーレアをかたどったものだった。この勝利と引き換えに女神はその姿を現し、そして天へ帰られたのだ。そう信じよう」

彼女は瓦礫の山を見上げた。そして、遠い目をして言った。

「思えば、この旅は私にとって不可思議なことばかりだった。私には、此度の勝利は神の手によって導かれたものだったとしか思えてならぬのだ……」

ヘモドロスが口を開いた。

「では、帰られてから王にウイクトーレア神の祭壇を造るよう進言してはいかがでしょうか？」

その案に、クリスティーナは力強く頷いた。

「名案だ。ヘモドロス。道中手に入れた妖精の道具もそこに奉ることとしよう」

「しやせまし、えーと、せすや、あらましー」

ただたどしい口調で古文の教科書の例文を読み上げる美奈。

翼の生えた女神をかたどった銀色のイヤリングが、彼女の右耳でゆっくりと揺れていた。

美奈、巨人と戦う（後書き）

なんとかオーガ討伐の旅が終わりました。

なお、このあとクリステイナー一行は無事に王国へ帰ります。

次回は王国に帰ってからのお話です。ちょっと毛色の違う展開を考えてますので、どうぞお楽しみに。

クリスマス様、駅前立つ（前書き）

テルマエ・ロマエっぽい展開

クリス様、駅前立つ

「クリス様！ クリス様！」

宮殿警護の巡回中だったカンパレア王国の筆頭騎士、クリステイナは呼ばれて振り返った。慌てた表情の男が駆け寄ってきた。男は彼女に追いつくと、ぜえぜえと息を切らしながら言った。

「ああ、よかった。騎士団長殿を探したのですが見つからなかったもので……」

「父上は王と軍議中だ。一体どうしたというのだ？ そんなに血相を変えて」

「いえ、ひとつ問題が発覚いたしましたして、至急ご報告をと思ったのですが……」

その男 厩舎長ディアンは、額の汗を拭きながら困った表情をした。それを見て、クリステイナは言った。

「私でよければ話を聞こう。後で父上に取り次いでおく」

ディアンは「ああよかった」とほっとした様子で、クリステイナを騎士団の厩舎へ案内した。

宮殿の外郭にあるカンパレア王国騎士団の厩舎はがらんとしていた。それを見てクリステイナは驚いた。

「これは？ 馬がほとんどおらんようだが……？」

ディアンは汗を拭いながら答えた。

「ご覧の通りです。実は、今ここには緊急連絡用の馬が二頭いるだけでして……」

「なんと！ それはどういうことか！？ 騎士団の馬はどこへ行ったのだ？」

「実は、クリス様がオーガ討伐に出られている間に、西方の町で魔物たちの大規模な攻勢があったのです。それを鎮圧するために、

第二騎士団が半数の馬を持ち出しまして……」

「うむ、第二騎士団の件は聞いておる。しかし、それでもまだ半数は残っておるはずだ」

「ええ、ですが、それはほとんど王都周辺の警戒に出ています。それでも馬が足りず、中には東の見張り塔まで毎日徒歩で通っている者も……」

王都から東の塔までは四里ほど離れていた。クリスティーナはそれを聞いて目を丸くした。

「なんと、東の塔まで毎日徒歩でか！？　そこまで馬が足りておらぬのか……！」

「はい。それで、なんとかできないものかとご相談したかった次第です」

「分かった。父上に伝えておこう。しかし、これは簡単に解決できる問題ではないな……」

「……これは私の腹案なのですが、いつそ民の持つ馬を徴収してはいかがかと存じます」

それを聞き、クリスティーナは考え込んだ。しかし、すぐにそれに答えた。

「……それはならんな。民の馬は生活に欠かせないものだ。それを徴収しては民の暮らしが立ち行かなくなる。王もお許しにはならんであるう……」

「は！　迂闊なことを申しました。申し訳ありません」

デイアンは頭を下げた。クリスティーナはがらがらになった厩舎を見渡しながら、なおも考え続けていた。

「しかし、これをすぐになんとかすることは難しいな。何か馬の代わりのものでもおれば良いのだが……」

「……代わり、ございますか？」

「ん？　言ってみただけだ。気にするな。魔物の中には龍や獣を乗りこなすものもいると聞いておるからな。馬以外に乗れるものがないかと、ふと思ったただけだ」

クリスティーナはディアン顔を見ながら、にやりと笑った。それを見たディアンの顔がすこし赤らんだ。

「では、この件、ぜひとも騎士団長殿にお伝えください」

「うむ、しかと伝えよう。父上ならきつと良い案をお持ちのはずだ」

二人は話しながら厩舎を出ようとした。その時

ヒヒヒーーーーン！

突然耳元で聞こえた鳴き声に驚いたクリスティーナが振り向くと、目の前に馬の姿があった。その馬の上に乗っていた兵士は、市中見回りから帰ってきたところだった。彼が厩舎に入ろうとしたところ、突然その中から出てきたクリスティーナの姿に驚き慌て、そして思わず手綱を引いたのだ。馬はそれに驚いて高々と前足を上げた。

その馬の蹄の先がクリスティーナの頭を強く打ちつけ、そして彼女は気を失った

雑踏と車が走る音が聞こえていた。

気が付くと、彼女は駅前前のバス停の前に立っていた。いや、もちろん彼女はそこが駅前だとも、目の前にあるものがバス停だとも認識していなかったが

「はて？　ここは？　厩舎にいたはずだが……」

クリスティーナは呆気にとられて辺りを見渡した。そこは、通勤や通学途中の人で溢れていた。

「ずいぶん人が集まっているな……祭りだろうか？」

その時、ふとクリステイナは鼻につく異臭に気付いて咳き込んだ。

「な、なんだこの臭いは!？」

焦げ臭いような、どこかで何か妙なものを燃やしているような臭いがたちこめておる! 祭りの催し物で煙を焚いておるのか?」

クリステイナはその煙 排気ガスで涙目になりながら、手で鼻と口を覆った。そして、改めて辺りを見渡した。よく見ると、人々はみな一様に黒っぽい服 ビジネススーツや学生服などを身につけていた。まるで見たことの無い形状の服を見て、彼女は首を傾げた。

「なんと不思議な格好か。あの服、ローブでも鎧でもない……。カンパレアでもあのような格好をする者は見たことが無い……。あれがこの祭りの装束であろうか?」

ふと見ると、自身もそれに似た服を着ていることに気付いた。紺色のブレザーに、やや短めのチェックのスカート。ブレザーの胸元には白い糸で校章の刺繍がほどこしてあり、それはカンパレア王国騎士団の紋章を髣髴とさせた。 はて、このような服が騎士団にあつたらうか? と彼女は首を傾げた。

もう一度辺りをよく見渡すと、周りに立ち並ぶ建物は一見石造りの様であるが、これまで見たことのない建築様式だった。中には巨大な一枚硝子がいくつもはめ込まれたものもあり、それは彼女をひどく驚かせた。また、それら建物には不思議な文字で書かれた看板が掲げられたものもあった。そういった異国情緒溢れる町を歩き交う人々は、カンパレアの人間より小柄であるように感じた。

「どうやら高度な文化を形成しているようだな。

高い文明を持つ小柄な種族……。もしか、ホビット族というものたちだろうか?」

しかし、何故私はホビットの祭りの中に立っておるのだ……？」
もはや、いつの間にかカンパレアとは違う場所移動してしまった
のだろうか、と彼女は思った。

その時、突然目の前に壁が現れた。クリスティーナは驚いて、
思わず飛びのいた。

「プシュー」という音と共に、その壁に穴が開いた。
彼女は啞然としてその様子を見守った。穴の中には空間が広がっ
ており、いくつかが椅子があるように見えた。クリスティーナが呆気
にとられていると、背後から男の声がした。

「ちよつと、お嬢ちゃん。乗らないの？」

その声に驚いて、彼女は振り返った。サラリーマン風の壮年の男
性が立っていた。ぽかんと口を開けたまま立ち尽くすクリスティー
ナを見て、男は「乗らないのかな？」と確認し、そのまま彼女の横
をすり抜けて穴の中へ入っていった。その後が続いて、人々がぞろ
ぞろと列をなしてその穴の中へ入っていった。

暫しの間を置いて、またも「プシュー」という音がし、その穴が
閉じられ、壁がゆっくりと動き出した。

見ると、壁と思っていたそれは大きな箱状の乗り物だった。その
車体には『市内巡回バス』と書かれていたが、彼女には当然それを
読むことはできなかった。箱状の乗り物にも驚いたクリスティーナ
だったが、それよりも先ほどの男の話していた言語の方に対する驚
きが強かった。

「今の男が話していたのは異言語だった……！ やはりここはカン
パレアではない！」

今まで聞いたことも無い謎の言語　日本語で話しかけられたこ
とに、彼女はうろたえていた。

「一体いつの間にもこのような場所に来てしまったのだ？
馬に蹴られたところまではほんやりと覚えているのだが……！」

クリステイナは立っただけのまま考え込んだ。その間にも、何度か彼女の目の前に大きな箱が現れ、そして多くの人々を乗せて彼らを運び去った。

その時、彼女は目の前を黒い影が横切るのを見た。右から左へ、それは瞬く間に目の前を横切ったので彼女は思わず目を見開いた。慌ててその影の背中を目で追うと、それは何かにまたがった人のようであった。それは街中を歩く人々の数倍の速度で走り、その背中は何となく遠ざかっていった。

「なんだ、あれは……？」

銀色に輝く物体にまたがり、風のように駆け抜けていくその背中を、クリステイナは瞬きをするのも忘れてじっと見ていた。ふと気付くと、他にもその物体に乗っている者がちらほらと見られた。それはひとつひとつ色が異なり、黒色で鈍く輝いている物もあれば、鮮やかな赤で塗られている物もあった。しかし、どの色の物体でも一様にその形状は同じであり、細い棒を三、四本組み合わせたような体に二つの黒っぽい車輪が付いていた。彼女はその物体に興味を持っていた。

ふと右を見やると、道沿いにずらっと並べられた物体が目に入った。最初、それは祭りの装飾の類だと思っていた彼女だったが、少し近づいてよく見ると整然と並べられたそれは、あの物体 自転車であった。

「これか、さつきから皆が乗っている物は……。これは一体何だ？」
彼女は吸い寄せられるようにそのうちの一台に歩み寄った。車体

を構成する棒に手で触れてみるとひんやりと冷たく、それが金属であるとは分かった。車輪はまるでトカゲの皮のような不思議な素材でできており、指でぐっと押すとそれは力強く跳ね返された。彼女はその自転車の傍らにしゃがみこんだ。周りでは学校や会社に向かう人々が次々と各自の自転車にまたがって走り去り、彼女は彼らがそれを操作する様子を観察しながら目の前に置かれている自転車をしげしげと眺めた。

「なるほど、ここに座るのだな……。そしてその体重を支える棒が真下に伸び、それに連結する棒がそれぞれ前後の車輪へと繋がる。ふむ、この構造は興味深い。このくるくる回るところに足を乗せてその力を金属製の鎖で後輪に繋げる仕組みか……。」

しゃがんだまま自転車のペダルを手でからからと回しながら、彼女は自転車の仕組みを分析した。そして興味深そうに一人うなずいた。

「しかし、こんな車輪が二つしかない乗り物がどうして倒れずに走れるのだろうか？」

「そういう魔法が掛けられているとも思えぬ。一度乗って試してみたいところだな……。」

「そう思い立ち、その自転車にまたがろうとしたとき、背後から声がした。」

「あ……！ その自転車、俺の……。」

クリスティーナがその声に気付いて振り向くと、そこには黒い服を着た少年が立っていた。少年の顔はまだあどけなく、年のころは十二、三に見えた。黒い服に金色のボタンがいくつかが光っていた。

中学校に入りたてのその少年は、自分の自転車にまたがろうとし

ている彼女を目の当たりにして戸惑っていた。クリスティーナはその様子を見て、この自転車がその少年の持ち物なのだと気付いた。

「すまない。つい興味をそそられたのだ。許してくれ……」

クリスティーナは頭を下げ、その自転車を少年に返した。少年はその言葉を聞いて非常に驚いた様子で、おずおずと歩み寄って上目づかいで彼女を見た。そして、「せ、センキューベリーマッチ……」と呟くと、あたふたと慌てた様子で自転車に乗り、その場から勢いよく走り出した。

その背中を見ながら、クリスティーナは唇に人差し指を当てて考えた。

「ふむ、この乗り物は一人一人に割り当てられておるのだな。ならば、勝手に乗り回すわけにもいかんか……。」

その時、少年が走り去った先から、がしゃん！ と大きな音がした。

見やると、そこには先ほどの少年と自転車が倒れていた。その周りを、少年より一回り体の大きな五人の少年たちが取り囲んでいた。倒れた自転車の車輪がからからと乾いた音をたてて回る中、少年たちの一人が怒声を上げた。

「おら、てめえ、どこ見て走ってんだよ！ どこ中だお前？」

どうやら自転車の少年は、その少年たちの一団とぶつかってしまったようだった。その少年の一団は全員黒い服のボタンを外しており、その内側から赤や青といった鮮やかな色のシャツが見えていた。自転車と衝突した少年が、その接触したと思われる腕を軽くさすりながら言った。

「いてーじゃねーかよ、オイ。何ぶつかってくれちゃってんのお前

「？」

その脇にいた少年も続けざまに口を開いた。

「ケンジがぶつかつちまつただろっが。骨とか折れてたらどうすんだコラ！」

「ぐ、ごめんなさい……」

蚊の鳴くような声で自転車の少年が詫びの言葉を口にした。その目には涙が浮かんでいた。

「は！？ 聞こえねえよ、ああああん！？」

そう言つて、少年の一人が倒れた自転車を激しく蹴飛ばした。

「こいつ、気にいらねえよ。やっちまおうぜ！」と叫ぶ声がした。

クリステイーナはその様子を遠目に見つめていた。そのうち、少年たちは自転車の少年を羽交い絞めにし、全員交互にその顔や腹を殴るなどの暴行を始めた。

「どうやら揉め事のような。しかし、五人がかりで一人を……なんと卑怯な……！」

騎士道精神に反する彼らの行為を見咎め、彼女はつかつかと彼らの元へと歩み寄った。

「RAEMYOH！ AK-IZAKSHUIAK-OKOHT-UKOMAK-IRIOHT!？」

（訳：止める！ 大の男が大勢で一人を囲んで、恥ずかしくはないのか！？）

背後から突然聞こえたカンパレア語。といつても彼らはそれが何語かすら分からなかったが、に驚き、少年たちは振り返った。そこには、一人の女子高生が憤慨した様子で立っていた。少年たちは奇妙なものを見るような目つきで彼女を見て、そして顔を見合わ

せ口々に言った。

「は？ 何だよこの女」

「つか、英語？ 外人か？」

「でも、どうみても日本人っぽくね？」

「いや、ハーフとか、帰国子女とかいうやつかもしれないぞ」

「コラ外人女！ 関係ねーだろ、すっこんでろよ！」

少年たちの一人が彼女を睨みながら歩み寄った。一方で、他の四人は依然として自転車の少年を痛め続けていた。それを見て、クリスティーナはさらに叫んだ。

「AKEAMIANY！ AD-EIKUM-UAROAS-IN
AJOA-HOBBIT！

（訳：やめないか！ 同じホビット族同士で争うことなど無益だ！）

「……何言ってるか分かんねえよ」

そう呟いて、少年はクリスティーナの胸ぐらを掴んだ。彼女は即座にそれを振りほどき、そしてすかさずその顔面に右の拳を叩き込んだ。不意に鼻先を殴られた少年は、思わずよろめいた。それを見た他の少年たちは、彼女を取り押さえようと掴みかかった。

「AN-IBEUR！（無礼な！）」

と叫び、彼女は少年たちを次々と投げ飛ばした。そして、凜として立ち、名乗った。

「私を誰だと思っている！？ 私はカンパレア王国の筆頭騎士、クリスティーナであるぞ！」

当然、これはカンパレア語で語られているので、少年たちは彼女

が何を喋っているのか皆目見当もつかなかった。しかし、その雰囲気から彼女の激しい怒りの感情だけは伝わった。

「な、なんだよこの女。ふざけやがって！」

「調子乗ってんじゃねえ！」

口々に怒りの言葉を叫び、少年たちがさらに飛び掛ってきた。しかし、クリスティーナはそれを華麗にかわし、少年たちが飛び掛るたびにその拳でカウンターを見舞った。それでも彼らは次々と襲い掛かってきたが、誰も彼女の身体に触れることもできずに翻弄され続けた。

だが、やはり多勢に無勢。たった一人で五人を相手にし、クリスティーナは息も切れ切れになっていた。

「おかしい、大して動いてもいないのに息が切れるとは……。」

身体のキレもいつもより良くない。先ほどからこの男たちの急所を何度か突いておるが、あまり効いておらぬようだ……。」

その時、ふと彼女は道の脇に金属の棒が突き出ていることに気付いた。その白い棒の先端には、なにやら板状のものが付いており、その長さ太さは、彼女がよく模擬戦で用いる鉄杖を連想させた。

「ふむ、あれを使ってみるか……。」

そしてクリスティーナはその棒に歩み寄り、それをぐっと握った。意外にもその棒はかなり強く地面に固定されていたが、彼女は歯を食いしばってそれを一気に引き抜いた。その様子を、少年たちは啞然として見ていた。そして、その引き抜いた棒を、彼女は鉄杖を扱ふときの要領でくるくると振り回した。

「少し軽いな……しかし、やはり思ったとおり使い勝手が良い」

彼女はその棒を両手に持ち、構えをとった。そして叫んだ。

「A H S - I O K T A E A K T。M O D - U R E G O ! !」

（さあ、かかってこい。下郎ども！！）」

少年たちはその様子を見て顔を見合わせた。

「ちよ、やべえつて、この女！」
「に、逃げようぜ……相手にしてらんねーよ、こんなの……」
彼らはそう口々に言い、怯えた様子で逃走した。その背中を見て、クリスティーナはふふん、と笑みを浮かべてカンパレア語で言った。
「ふん、恐れをなしたか。男のくせに情けない！」
その時、不意に彼女の視界がぼやけた。目の前が暗くなった

「クリス様！ クリス様！」

暗闇の中から呼ぶ声に、はっと気付いてクリスティーナは目を開けた。

厩舎長ディアンと、兵士の顔があった。ずきずきと痛む頭を押さえ、クリスティーナは起き上がった。

「ああ、気付かれましたか、クリス様！ 馬に蹴られたときはどうなることかと！」

心配そうにディアンが呼びかけた。

「誠に申し訳ございません！ 私が迂闊でした！」

兵士が深々と頭を下げた。クリスティーナは頭を押さえながらも兵士に片手を上げて答えた。

「……よい。誰にでも失敗はあるものだ……。それより、すぐに紙とペンを持ってまいれ」

兵士はきよとんとした顔で答えた。

「……は？」

「早く持ってまいれ！ 忘れぬうちに書き留めねばならないことがある！」

「は、はい！」

鬼気迫る様子のクリステイーナに気圧され、兵士は慌てて紙とペンを取りに走った。不安げな表情で見守るディアンに、クリステイーナは笑顔で言った。

「喜べ、厩舎長。この問題、解決できるぞ！！」

雑踏と車が走る音の中。

「……………美奈？」

女子高生、来須美奈は呼ぶ声に気付いて振り返った。そこには同じ学校に通う友人の姿があった。彼女はまだ眠気でぼんやりしながら挨拶をした。

「あ、おはよう、沙希ちゃん」

その友人　沙希は驚いた表情で美奈の手に持っているものを指差した。

「そ、それ、何？」

「……………え？」

見ると、美奈はいつの間にかその右手に白い金属の棒を握っていることに気付いた。

その長い棒の先端には、『止まれ』と書かれた赤い三角形の標識があった。

「……………えっ！　何これ！？」

美奈は、何故か手にしていた標識を見てうろたえた。啞然とする友人と、その右手に持っている標識を何度も見比べ、また、周りを行き交う人々からの奇異に満ちた目に気付いた。

美奈はあたふたとその標識を元あったと思われる場所　道路の脇にぼつかりと空いた穴に差し込んだ。そして、一刻も早くこの場

所から逃げ出そうと、冷や汗をかきながら友人の手を取って走り出した。

「いやはや、クリス様の発想には驚かされましたな！」

カンパレア王国の兵士訓練場の脇で、ヘモド罗斯はクリスティーナを褒め称えた。

訓練場の広場では、兵士たちが傷だらけになりながら、木製の乗り物を使いこなすための訓練を行っていた。クリスティーナがホビットの町で見たものを書き出し、それを参考に技師に作らせたその乗り物は、木製の車体に木の車輪を二つ取り付け、その後輪は鋼鉄の鎖でペダルと連結されていた。いわば木製の自転車とでも言うべきものであった。それを使いこなすにはある程度の訓練期間を要したが、新たに馬を調達する手間に比べれば、なんとということもない時間だった。

「しかし、このような機械仕掛けの木馬など、どうやって思いつかれたのですかな？」

ヘモド罗斯の問いに、クリスティーナは鼻をぼりぼりと掻きながら答えた。

「それが、自分でもよく分からんだ。ホビットの知恵、とでも言うっておこう……」

「ほほう、ホビット族にありますか。しかし、それをこの馬不足解決の策として提案するとは、やはり素晴らしい発想でございます。」

このへモドロス、感服いたしましたぞ。 おお！ また一人乗り
こなすことに成功した兵士が！」

へモドロスが指差す先では、苦闘の果てに自転車を乗りこなせる
ようになった兵士が歓喜の叫びを上げていた。

「しかし、クリス様、一体いつの間にホビット族の知恵に精通を？」

「……それは、まあ、馬に蹴られたときだな」

「……は？」

呆気にとられるへモドロスをよそに、クリスティーナは考えてい
た。

あのような不思議な体験、話しても誰も信じてはくれまい。

恐らくは知恵の女神ミネルウアのお導きだったのだろうな……

そして、彼女は目を閉じて静かに微笑んだ。その横でへモドロス
は「……馬？」と呟いて首を傾げた。

クリス様、 駅前に立つ（後書き）

前回までとは逆パターンで書いてみました。
カンパレア語はかなりテキストです。

美奈、召喚される(前書き)

ジャンルをコメディーに変えるべきか悩んでいます。

美奈、召喚される

よく晴れた昼下がり。青く澄み渡る空。時折優しく吹く風に、木々はそよそよと揺らいでいた。そんな庭の様子を窓から眺め、カンパレア王国の筆頭騎士クリスティーナは振り返ってもう一度室内を見渡した。

暗く、じめじめとした石造りの部屋の中では、黒いローブを羽織ったひ弱そうな男たちが部屋の床に這いつくばり、一心不乱に巨大な魔方陣を描き続けていた。クリスティーナは腕を組んで彼らを見下ろし、はあ、とひとつ溜息を吐いた。

「外はこんなにも心地よい陽気で溢れているというのに、このような場の警護とは何の因果か……」

彼女は残念そうに呟き、再び窓の外を見た。外に広がる宮殿の庭では、降り注ぐ陽の光の中、美しい色の蝶がひらひらとその羽を舞わせていた。思わずそれに見とれていると、彼女の背後から呼びかける声がした。

「……クリス様」

「わあ！」

突然低い声でぼそりと呼びかけられ、クリスティーナは思わず飛び上がった。心臓の鼓動を抑えつつ彼女が振り向くと、そこには黒いローブを纏った小柄な男が立っていた。男は長年の部屋暮らしの所為かその顔はすっかり土気色で、ぎよろりとした大きな目の下には真っ黒なくまがあった。その顔を見るや否や、クリスティーナは少しのけぞった。

「な、なんだ、ゾドバか。突然話しかけるな！ お前の声は心臓に悪い！」

クリスティーナはこの男 宮廷付きの魔道学者ゾドバが苦手だった。その異様な風貌も元より、普段は誰とも喋る様子も無く、ひたすら室内で魔道学の研究に打ち込んでおり、時折口をきいたかと思えば低く小さな声で一言一言だけぼそぼそと喋る。一体何を考えられているのかまるで分からないゾドバを、彼女はどう扱ってよいものか分からず困り果てていた。

そんな彼女の心境を知ってか知らずか、ゾドバはその大きな目でぎよろりと見上げてぼそりと口を開けた。

「……それは、大変失礼いたしました」

その言葉の後、暫く二人は沈黙のまま目を合わせていた。

ゾドバは何やら言いたげだったが、クリスティーナの言葉を待っているようだった。頬を引きつらせながら、ようやくクリスティーナが口を開いた。

「な、何だ？ 何か用があったのではないのか？」

ゾドバはなおもその目線と表情を変えずにゆっくりとした口調で答えた。

「はい。魔方陣が完成いたしました……。召喚を開始する準備を行いますので、しばしお待ちを……」

クリスティーナは彼の顔から目を逸らしながら答えた。

「あ、ああ、今日はオプス神の召喚だったな。なるべく早めに頼むぞ」

「……承知しました」

そしてゾドバは黒いローブの男たちを集めてそれぞれに指示をした。男たちはその言葉に従い、各々部屋から出て行った。恐らく神へ捧げる物を用意しに行ったのだろう。最後に、ゾドバは傍らの若い男に指示を与えた。

「……ドリウスよ、地下に保管した洗礼用の聖水を取りに行かねばならぬ。共に来てくれ」

「承知いたしました」

若い男の名はドリウスといった。彼はゾドバの下で魔道学を学ぶ

助手であり、その優秀ぶりはクリステイナーの耳にも入っていた。だが、やはり彼もゾドバに負けず劣らず寡黙な人物であり、これまた彼女の苦手な部類の人物だった。

ドリウスとゾドバは、聖水を取りに共に部屋を出て行った。そして、部屋の中にはクリステイナー一人が残された。彼女は窓の外を見ながらぼそりと呟いた。

「まったく、魔道学者という連中はどうして皆ああいう風に陰気なのだろうか？」

その部屋は宮殿の庭の一角に建つ建物、王国魔道研究所の中にあつた。

ゾドバは魔道研究所の主席研究員である。この日は、彼の主導で巨大な魔方陣による神々召喚の実験を執り行うことになっていた。なお、今回は豊穰の神であるオプス神より今年の農作物の収穫高に関する神託を頂くことが目的であり、その見届け人としてクリステイナーが選ばれたのだった。また彼女がこの場にいることは、学者たちが誤って邪悪な存在を召喚してしまった際の処理役としての意味合いもあった。

だが、こういった類の召喚実験で何かが召喚されたことは過去に一例も無く、クリステイナーは恐らく今回も失敗するだろうと踏んでいた。彼女は誰も居なくなつたその部屋の中で、今日何度目かも分からない溜息を吐いて、床に書かれた巨大な魔方陣を見つめた。

そこには直径二十尺もある巨大な円の中に、びっしりと幾何学模様を描かれていた。これを書き上げるために、ゾドバら研究員は昨日から夜を徹して作業していたという。魔方陣の周囲には魔法の品がいくつつか置かれていたが、彼女にはそれが何であるかはよく分からなかった。

「第一、こんなものを床に書いたところで、本当に神が呼び出せるのか怪しいものだ」

そう呟いて、彼女は窓際から離れて魔方陣へ歩み寄つた。

「そもそも何と書いてあるのだ、これは？」

彼女は腕を組んで魔方陣を見下ろした。

魔方陣には古代魔法文明の言語で豊穡の神を呼び出す意味の文が書かれていた。彼女にはその言語を読むことはできなかったが、古代の言語とは一体どういうものか、と好奇心でそこへ近づいた。

そして、彼女が魔方陣の中へ足を踏み入れた瞬間、激しい衝撃が彼女を襲った

「……………クリス様」

小さく呼ぶ声に気付いて、彼女は目を開けた。研究員たちが不安げな表情でその顔を覗きこんでいた。

「ふえ？」

美奈はその目を擦りながら身体を起こした。暗く、じめじめとした部屋の中。周りを黒いロープで身を包んだ男たちに囲まれていた。その中の一人　ゾドバがぼそりと言った。

「クリス様……………気付かれませんか」

美奈は状況が理解できず、しばらくぼーっとした様子でゾドバの顔を見つめていた。そんな彼女に構わず、ゾドバは言葉を連ねた。

「魔方陣の中に足を踏み入れてはなりません。お陰で魔力の流れが少し乱れてしまいました」

「……………まりよく？」

ぼそぼそと喋る男の言葉の全ては聞き取れなかった。美奈は辺りを見回し、呟いた。

「え……………ここどこ……………？」

それを聞いて、研究員たちは顔を見合わせた。

「化学室にいたはずだけど……………なんでこんなところに居るんだろ？」

首を傾げる美奈を見て、ドリウスが不安げな表情でゾドバに言った。

「ゾドバ様、どうやらクリスマス様の記憶が混濁しておられるご様子ですが……」

「いや、これは、もしや……」

ゾドバはしばらく考え込み、とある仮説を立てた。そして、その仮説を検証するために彼女にある質問を投げかけた。

「……失礼ですが、貴方様のお名前は？」

「え？ あたしの名前？ 来須美奈くるす みなだけ……」

美奈は突然名前を問われたことにすこし驚いたものの、はにかみながら答えた。

「なんと……！」

ゾドバは感嘆の声をあげた。それは彼の中で仮説が定説になった瞬間だった。そして彼はその大きな目をさらに見開き、ドリウスの肩を叩いて美奈に背を向けた。

「こちらへ来い、ドリウス！」

「こ、これはどういうことでしょうか、ゾドバ様？」

ドリウスはゾドバがその様子を豹変させたことにも少し驚いたようだった。先刻までまるで無表情だったゾドバの顔は興奮のあまり紅潮しており、その声も内から溢れる高揚感に溢れていた。

二人は美奈に背を向けたまま、声を潜めて話し出した。

「魔方陣に足を踏み入れたことでクリスマス様の中に何か変化があったようだ」

「変化、とは？」

「ドリウス、お前には分からんか？ あのご様子、明らかに普段のクリスマス様のものではない。あんなに朗らかな表情のクリスマス様など、お前も見ただことはないだろう？ 恐らく、魔方陣に足を踏み入れた

ことで何か高次の存在が憑依されたに違いない……！」

そう自信満々に語るゾドバの目は輝いていた。自らの師がそんな様子で語るのであれば、ドリウスも当然その説を心から受け入れた。

そして、彼らはまた美奈に振り返り、美奈に問いかけた。

「……失礼。もう一度お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「え、来須美奈、です」

それを聞いて、二人は頷いた。

「……ふむ」「なるほど……」

名前を聞くやいなや考え込んだ二人の様子に、美奈は少し戸惑った。

「えと……どうかしたの？」

「いえ、少しお待ちを……」

二人は慌てて取り繕い、また美奈に背を向けてひそひそと話を始めた。

「ドリウス、どうやら”クルスミナ”という名の神が憑依されたようだ」

「聞いたことがありますね。何の神であられるのでしょうか？」

「……豊穰の神を呼び出す魔方陣によって現れたのだ。それに近いものであるのは間違いないだろう」

「では、当初の予定通りに進めましょうか」

「うむ、まずは捧げ物を持つてくるのだ」

そして二人は他の研究員に合図をし、神に捧げる予定だった品々を運ばせた。洗礼済みの野菜や果物、肉、魚、塩や小麦粉などの食材、そして数々の魔法の道具などが次々と部屋の中に運び込まれ、それらは美奈の前に整然と並べられた。そして、ゾドバはその内から果物が積まれた皿を選び、他の研究員らと共に美奈の前に跪いてそれを恭しく差し出した。

「クルスミナ様、まずはこれをお納めください」

「え……、うん」

瞬く間に自分の前に色々なものを並べられて唾然とした美奈は、言われるがままにその果物の皿から桃に似た果実をひとつ手に取った。

これを食べるってことなのかな？

美奈は、手に持った果実のにおいを嗅いでみた。甘く良い香りでした。そして、恐る恐るそれに噛り付くと、口から鼻にふんわりとバラのような良い香りが吹き抜け、さらに梨のようなみずみずしさと共に、桃にハチミツをかけたような甘さが口いっぱい広がった。それは美奈がこれまで全く体験したことのない味であり、驚きのあまりつい声が出た。

「何コレ？ すっごく美味しい！ コレ、超ヤバイ！！」

その言葉を聞いて、ゾドバとドリウスは顔を見合わせた。そして美奈に気付かれないよう小声で言葉を交わした。

「ゾ、ゾドバ様！ 今、ヤバイって、ヤバイって言いましたよね！？」

「うむ、私もそう聞こえた。これは今年は大凶作になるという意味だろうか？」

「か、確認してみましよう！」

そしてゾドバは仰々しい口調で美奈に問いかけた。

「クルスミナ様、その作物の来年の取れ高などはいかがなものでしょうか？」

「ふええ！？」

その果実を夢中ではおぼっていた美奈は、予想だにしなかった問いかけに驚いた。そして、愛想笑いと共に答えた。

「え、えーと、そういうのはあたしには分からないかな……あはは

「な、なんと？」

ゾドバは思わぬ返答にうろたえた。そして、また美奈に聞こえないようドリウスと小声で話し出した。

「ドリウス、どうやらこの方は豊穣の神ではないようだ……」

「……間違えたのでしょうか。なら、この方は一体……？」

不安げな表情でひそひそと話す二人を見て、美奈は二つ目の果実を手に取りながら言った。

「えと、作物のことなら農家の人に聞いたほうがいいんじゃないかな？」

「……ノ、ノーカー？」

「うん、農家の人」

それを聞き、ゾドバはいそいそとドリウスの肩を叩いて美奈に背を向けた。そして二人はまた小声で話を始めた。

「ノーカーとは何だ？ 神の名前か？ お主、知っておるか、ドリウス？」

ドリウスは美奈の言ったことを冷静に分析し、ゾドバに伝えた。

「分かりません。しかし、”作物のことならノーカーに聞くべし”

と。さらに”ノーカーは人”と仰られたかと……！！」

「人、とな？ どういうことだ？」

「作物のことに詳しいのは、豊穣の神オプスに他なりません。とすると、オプス神がノーカーという名の現人神として光臨された、という意味では……？」

「ふむ、ならば、この方は転生を司る神、ということになるな。我々はオプス神を呼び出したのだが、すでに転生された後であったので、この方が現れたのだろう」

そして二人はまた美奈のほうに振り返り、問いかけた。

「クルスミナ様、そのノーカーという者はいずこに現れたのでしょうか？」

「え？ 農家の人なら、畑とか田んぼとかに行けば居ると思うけど」

「……なんと、そのような場所に居られると！」

ゾドバは慌てた様子でドリウスに指示を出した。

「ドリウス、至急手配するのだ。王国の畑のいずこかにノーカーという名の現人神が光臨されておる！」

「し、承知いたしました！ それではすぐに騎士団長へ報告を……」

「！」
そう言っただりウスはばたばたとその場から離れ、部屋を出て行った。

一方、美奈はそんな周囲の様子を一切気にすることも無く、二つ目の果実をぺろりとたいらげた。さらに三つ目の果実に手を伸ばそうとしたとき、ふと自分の目の前に並べられている様々な魔法の道具に気がついた。

これ、何だろ？ なんだか不思議なものが一杯置いてあるな……

美奈はその中の一つを手を取った。それは小さな皮袋で、袋を通して中身がぼんやりと赤く光っていた。興味をそそられた美奈は、その袋を開け、中を覗こうとした。

すると、それを見たゾドバが慌てて注意した。

「あ、クルスミナ様、それは火吹き竜の炎袋でして……！」

「きゃーーーーー！！！」

袋の中を覗いた瞬間、そこから強烈な熱気が吹き上げてきた。美

奈は悲鳴をあげ、思わず目を閉じた

「美奈、美奈ってば！」

呼びかける声と共にゆさゆさと身体を揺り動かされ、美奈は目を開けた。すると、目の前には火の付いたアルコールランプと、その上でぼこぼこ沸騰する液体の入った試験管があった。

「あ、熱っ！」

美奈はアルコールランプの熱気に気付いて思わず飛び起きた。傍らにいた友人　沙希が呆れた顔をした。

「アルコールランプの横で寝てれば、そりゃ熱いわよ……」

美奈は辺りを見渡した。周囲では、生徒たちが和気藹々と化学の実験を進めていた。

「え？　何？　化学室！？　さっきの桃は！？」

「……桃、って、寝ぼけてる？」

てか、どうして実験中に寝れるのか不思議だわ。いつの間にか寝てるんだもん」

溜息を吐く沙希の横で、美奈は思わず天を仰いだ。

「あうー、もう一個食べときゃよかったよー」

「夢の中の桃の話はいいから。ほら！　実験進めるよ！」

「はーい……」

少し苛立った様子の沙希に促され、美奈は渋々ノートを開いて実験の様子を記し始めた。

カンパレアの王都のはずれの小さな丘に、ひとつの神殿が新たに建造されていた。クリステイナーとヘモドロスは、転生の神を奉るために作られたその神殿の中を歩いていった。

クリステイナーは真新しい神殿の中を見渡して、感嘆の溜息と共に呟いた。

「しかし、あの実験が成功したとはな……まさか本当に神が現れるとは……」

その言葉を聞き、ヘモドロスが不思議そうに問いかけた。

「おや？ クリス様もその場に居られたと伺っておりますが？」

「残念ながら、私は魔方陣に足を踏み入れた衝撃で気を失っておったのだ。誠に惜しいことをした」

クリステイナーは悔しそうに下唇を噛んだ。あの日、彼女が目を覚ましたときには、すでに神が立ち去った後だったと聞かされていた。

ふとヘモドロスが口を開いた。

「ところで、この神の名は何と仰られましたかな……？」

「確か、クルスミナという名前の神だったとか。私は初めて聞いた神だったが、どうやら転生の神らしいな」

その名前を聞いて、ヘモドロスは少し考え込んだ。

「クルスミナ、聞き覚えがありますな……どこで聞いたのか……」

「ほう、その神の名を聞いたことがあるのか。さすが博識だな、ヘモドロス」

「いえ……」

その名をどこで聞いたのか、ヘモドロスは懸命に思い出そうとした。そして、とある情景に辿り着いた。

『クリス様じゃないってば！ あたしは来須クルス！ 来須美奈クルスミナっ

ていつの!』

そう、それはあのオーガ討伐の旅の最中、取り乱したクリスティーナが発した言葉だった。それに気付いた瞬間、ヘモドロスは思わず声が出た。

「あああつ!」

「ど、どうした?」

突然大声を出したヘモドロスに、クリスティーナは驚いた。いぶかしげな表情をする彼女を気遣い、ヘモドロスは平静を装いながら問いかけた。

「…いえ、なんでもありません…」

その、念のため確認しますが、神が現れたときクリス様は気を失っておられたのですな?」

「……そうだが?」

それを聞き、ヘモドロスの額に冷や汗が流れた。

これは、恐らく実験中に取り乱したクリスティーナの様子を見た魔道学者たちが、彼女に神が憑依したと勘違いしたのだろう、と直感した。

真実に気付いたヘモドロスだったが、すでに建ってしまった立派な神殿を見渡し、それを心の内にしまうことにした。あとでレグルスにも口止めをしなくては……、と考えていたその時、神殿の奥から一人の男が近づいてきた。

「おお、クリス様」

その男　ゾドバはクリスティーナの姿に気付き、声を掛けてきた。

「む、ゾドバか……?」

ゾドバの姿を見て、クリスティーナは目を疑った。大きい目は相変わらずだったが、その顔の血色は良く、以前よりは少し遅しくなったような気がした。彼は神と会話したことで自らこの神殿の建造を王に進言し、さらにはその神殿を理想的なものとするべく毎日建

造現場へ足を運んだという。その日々が彼をここまで変えたのだらう、と彼女は思った。

ゾドバは口元にぎこちなく、けれど心からの笑みを浮かべてクリスティーナに言った。

「いや、先日の召喚は大成功でした。しかし、あれと同じ実験を何度か行ったのですが、うまくいかないのです。依り代として研究員たちを使っておるのですが、どうやら相性が悪いようで……」

「ほ、ほう……」

その口調も以前とは異なり、はきはきと気力に満ちた物言いだっただ。クリスティーナは、以前とはまるで別人のようになったゾドバに驚いていた。ゾドバはなおも続けた。

「そこで提案なのですが、是非またクリス様に実験に参加して頂きたいと思ひまして……」

それを聞き、思わずへモドロスが口を挟んだ。

「な、ならん！ それはならんぞ、ゾドバ殿！ クリス様はお忙しい身じゃ……」

クリスティーナは、突然激しい剣幕で怒鳴りだしたへモドロスに驚いた。

「ど、どうしたのだへモドロス。突然大きな声を出して……」

「クリス様、ぜつつつっつたいにお受けになりませんように……！

絶対ですぞ……！！」

「わ、分かった分かった……。すまんなゾドバ、こういうわけだから私の参加は諦めてくれ」

クリスティーナは苦笑いを浮かべ、ゾドバの誘いを断った。ゾドバはとても残念そうな表情をした。

なお、兵士たちが王国中の畑を必死に搜索したものの、当然”ノーカー”なる人物は発見されなかったことは言うまでも無いだろう。

美奈、召喚される（後書き）

カンパレアで信仰されてる神々はローマ神話に準じています。

もちろん、クルスミナ神はローマ神話にはおりませんが。

沙希、魔城に立つ

彼女 湯浅沙希ゆあさ さきは目を開けた。

天井が見えた。だがそれは彼女が就寝前に見たはずの自室の天井とは大きく異なっており、石造りの天井から黒いシャンデリアがぶらさがっていた。

起き上がってみると、そこはまるで知らない場所だった。二十畳近い広さの石造りの部屋の中央には大きなクイーンサイズのベッドが置いてあり、彼女はその上で眠っていたようだった。部屋にはカーテンがかけられた大きな窓があり、彼女はそこに近づいてカーテンの隙間から外を見下ろした。

窓の外には草木一本生えていない灰色の大地が広がり、遠くには黒い山々がそびえていた。山の頂上からは噴煙がいくつか上がっており、それが火山であることが分かった。初めて見る光景に、彼女はここが自分のいた世界とは異なるものだとして理解した。そして彼女は呟いた。

「そか。夢だ、コレ……」

それにしても随分現実味のある夢だと思いながら、彼女は頭をぼりぼりと掻いた。ふと、その手が雪のように真っ白であることに気付いた。

「すっごい色白……。しかも肌スベスベだし」

自分の腕を触りながら、聡明な彼女はそれが本来の自分の身体でないことも即座に理解した。そして、今の自分の身体が一体どういうものなのかを見ようと、部屋の片隅にある鏡の前に立った。

そこには、絶世の美女の姿があった。手足はすらりと細く、小さな顔にはすじの通った高い鼻と切れ長の目、その瞳は小さな赤い光を帯びており妖艶な魅力を放っていた。さらに、彼女がその透き通るような銀色の長い髪を触ると、それはきらきらと光りながらふわ

りと揺れた。

「すごい……！ 外国の女優みたい！」

彼女は歓喜の声をあげた。すると、その声に気付いてか、部屋のドアの外からノックの音と共に呼ぶ声がした。

「お目覚めで御座いますか、サキユバス様」

その声と共に部屋のドアが開き、そこから黒い人型の塊が現れた。子供ほどの大きさの、泥で作られたその塊はゆっくりと部屋の中に入ってきた。沙希はそれを見て驚いたが、夢の中だからそういうこともあるのだろうと納得した。泥の塊は彼女の目の前で止まり、恭しくお辞儀をした。

「おはようございます、サキユバス様」

「ん、夢の中で言うのも変だけど、おはよう。……で、ここはどこで、どういう設定？」

すると、泥の塊はその顔の一部をぐにやりと歪め、小さく「ウウ」と唸るような声を出した。人間のそれとは異なるが、恐らく微笑んだのだろうかと思っただ。泥の塊が口を開いた。

「これはご冗談を。ご自身の城をお忘れで？」

「城？ ああ、ここ、あたしの城なんだ」

先ほど窓から見た景色が相当な高さから見下ろしたものであったことや、この非常に広い寝室から、彼女はこの城が相当大きなものであると考えた。

「あたしの城があ。ってことは、あたし、女王様ってことかなー」

と、ひとりにやける沙希に、泥の塊が語りかけた。

「すでにご朝食の用意はできております。どうぞ、ホールへ……」

「朝食か。うん、お腹はすいてる。ところで、あなたの名前は何ていうの？」

「私たちホムンクルス（人工生命体）には名前などありません。

ただ、貴方様はよく私のことを”小さい奴”もしくは”クライン”と呼ばれますが」

「じゃあ、朝食会場まで案内して、クライン」

沙希はワクワクしていた。このような立派な城の主である人物に、どのような豪華絢爛な朝食が出されるのだろうか、と期待に胸を膨らませていた。

沙希は寢室を出て、クラインに案内されるまま石造りの廊下をゆつくりと歩いていた。どこまでも続くかと思わせるその廊下は薄暗く、その行き着く先は暗闇に包まれて見えなかった。足元にはひんやりとした空気が流れていた。彼女はクラインに言った。

「なんか、陰気なとこだねー。もっと照明とか付けたらどう？」

「またそのような冗談を仰るとは、本日はお目覚めが一際よろしかったようですね。」

言うまでもありませんが、我々魔族にはこのような雰囲気が最も良く合うのです」

「魔族か。こないだ読んだ小説にそういうの出てきたかな」

「魔族の女王ともあられるお方が、まるで人間のようなことを仰いますな」

クラインはまた唸るような声で小さく笑った。それを聞いて、沙希は呟いた。

「そか。あたしは魔族の女王っていう設定なのか……」

廊下を進み、階段を下りたところにホールがあった。沙希とクラインがそこへ入ると、大きな部屋の中に長方形のテーブルが置いてあり、その一席にフォークとナイフ、ナプキンが設えてあった。

クラインに促されるまま沙希がその席に着くと、すぐさまホールの奥から料理の乗った皿を持った泥の塊たちが現れ、彼女の前にそれを丁寧に並べだした。給仕係の泥の塊たちはクラインより一回り大きく、沙希はクラインが”小さい奴”と呼ばれていることに納得した。

彼女は目の前に置かれた料理の数々をまじまじと見て言った。

「なんだか、見たことの無いものばかりね……。これは肉、のようだけど？」

沙希は中央の皿に乗った赤黒い楕円形の物体をフォークでつつきながら問いかけた。それを見て、傍らに立つクラインが淡々と答えた。

「本日は活きの良い大ネズミが入りましたので、それを丸焼きにしております」

「うえ、ネズミの丸焼き……？　じゃあ、こっちの丸っこい煮玉子みたいなのは？」

「それは、大王ムカデの肝の燻製ですな。毎日食べられておられるものと同じですか？」

「ム、ムカデえ！？　それを毎日食べるってのはいくら夢でもちよつとキツツイなあ……」。

えーと、じゃあこっちのスープは何が入ってる？

当然変なもの入れてるのは分かってるけど、あえて聞いてみるわ」
深底の皿に入ったそのどろどろとした液体は鮮やかな緑色で、その中には黒色の固形物がいくつか入っているのが見えた。クラインはまた淡々と答えた。

「それはコウモリとコガネムシのスープですな。本日はさらにトレントの樹液も入っております」

「と、とれ……何？」

「トレント、ですな」

この世界でのトレントとは、老木に邪悪な意思が宿って動き出した魔物のことを言った。そのトレントが何のことかはよく分からなかった沙希だったが、恐らく知らないほうが幸せである類のことだと感じてそれ以上は追求しなかった。そして、彼女はバスケットに入った真っ黒なパンを取り出して言った。

「えー、まあ、いいや。こっちの不自然に黒いパンは？」

「そちらはいつも通りのごく普通のパンですが……」

ムカデを毎日食べているような連中だ。当然普通じゃないな、と

感じた沙希は、掘り下げて聞いてみた。

「……パンの材料は？ 小麦粉？」

「普通の、巨大アリを乾燥させて挽いた粉、でございますが？」

彼女は思わず手に持っていたパンを皿の上に放り投げた。そして、テーブルをバン、と叩いた。

「それが普通って……、一体どういう食生活なのよ、ここは！？」

給仕係の泥の塊たちは沙希のその様子を見てすみあがった。クラインがおずおずと口を開いた。

「お、お、落ち着いてください、サキュバス様。本日の朝食に何かご不満でも？」

「不満も何も、不満だらけよ！ 何でこんな変な料理ばかりなの！？」

彼女は席から立ち上がり、激しい剣幕で怒鳴り散らしながら目の前の皿の数々を指差した。すると、クラインが深々と頭を下げて言った。

「も、申し訳御座いません。本日のご朝食はお気に召さなかった様子ですな。」

これを作った料理長は後ほど首をはねて丸焼きにし、今夜のメインディッシュにでも致しましょう」

それを聞いて沙希は口元をひきつらせた。

「く、首をはねるって……？ しかも、今夜のメインディッシュ……！？」

クラインの言葉に意表を突かれて少し冷静さを取り戻した沙希は、ゆっくりと席につき、左手で髪をかきあげた。そして、おもむろに口を開いた。

「あのさあ、あたしは別に料理長をどうこうしろとは言っていないわけよ。」

そもそも、料理長とかそんなの食べたいとも思っていないし。

あたしはね、もう少し人間らしい食事とか出せないのかって言いたいのに！」

「に、人間らしい……?」

クラインは我が耳を疑った。まさか魔族の女王の口から”人間らしい”などという言葉が飛び出すとは夢にも思っていなかったからだ。戸惑った様子のクラインに、沙希はまくしたてるように続けた。「そう。例えば、肉だったらビーフとか、チキンとか。

牛や鶏が食べたいのよ。こんなしなびたようなネズミの肉なんかじゃなくてね」

「しかし、そのような肉は下衆な人間どもの食べるもので御座いますゆえ……」

「あたしが食べたいって言うてるの!!」

沙希はまたテーブルをばん、と叩いた。その音でクラインは肩をすくめた。

「は、ははっ! では、すぐにでも人間の集落を襲わせて調達を…

…」

「ちよつと待ったー!」

「はい?」

「今、集落を襲うって言った……?」

沙希は怒りを湛えた目でクラインをぎろりと睨みつけた。彼女の瞳の奥の赤い光が鋭さを増したことに気付いたクラインは、慌てて説明した。

「ですから、牛や鶏は人間の家畜ですので、それを育てている人間の集落を襲いまして……」

「ダメ! そんなの絶対やっちゃダメ!

そうやってすぐ暴力で解決するから、皆から見捨てられてこんな貧相な食生活になっちゃうんだわ!」

どうやら魔族というのは非文明的かつ暴力的な生物のようだ、と彼女は認識した。せっかくだから、ここはひとつ女王として彼らを教育してやらなければならぬとも思い始めていた。

クラインがおずおずと問いかけた。

「で、では、一体どうすれば……? この近辺では野生の牛や鶏は

なかなか見つけれませんが……」

「人間からお金で買うのよ！ 少しでも譲ってもらおうの。酪農家の人たちに」

「お、お金……？ 人間どもから頂いた金貨や財宝などはいくらかありますが……」

「そう、その金貨で買ってくるの！ ……まあ、その金貨や財宝の入手経路はこの際問わないけどさ。

そうやって社会的な関わりを持っていかないと、いつまで経っても人間社会に溶け込めないんだからね！」

「人間社会、ですか……。しかし、売ってくれるでしょうかね？」

「売ってくれなくても一生懸命頭を下げれば大丈夫よ。熱意は伝わらわ、きつと」

沙希の熱弁は留まることを知らず、ついにクラインが折れた。

「ま、まあ、仰せとあれば骸骨兵どもに金貨を持たせて近くの村に向かわせます……」

「あ、ついでに玉子と牛乳もね。朝食には欠かせないから。あと、レシピも聞いてくるとなおOKよ」

「はあ……」

「それと、ムカデとかコガネムシとか、こういう昆虫系を料理に入れるのは絶対禁止！」

それを聞いたクラインは思わず身を乗り出した。

「しかし、昆虫は考えうる中でも最高の食材なのですが……私どもの主食ですし……」

「ダメよ！ あんた人間の気持ちになって考えてみなさい。

隣にいる人が虫なんかばりばり食べてたら、その人と仲良くなるうと思ったりする？」

「無いでしょ？ 当然の理屈よ！」

「は、はあ……。なにぶん、人間の気持ちがよく分かりませぬものでして……」

一体いつから女王は斯様に人間寄りの思考をするようになったの

だろう、とクラインは疑問に思った。

そこへ沙希が早口でまくしたてた。

「だから、そうやって理解しようとしなから、いつまで経っても人間になれないんだってば！」

「いえ、別に人間になりたいなどと思っではおりませんが……」

「そんなこと言って、後になってどこかの妖怪人間みたいに”人間になりたーい！”なんて叫んでも遅いんだからね！」

「はあ。妖怪人間とは聞いたこともございませんが、奇特的な種族もいたものですか」

魔族にとつて人間は決して相容れることの無い存在であり、憎むべき相手、さらには己より低次の存在として見下すべき敵でもあった。そんな人間になりたいなどという考えは、魔族の誰にとつても思いもよらぬことである。

そこでクラインは、ははあ、さてはまた冗談を口にされておられるのか？ と考え、顔を歪めて愛想笑いを浮かべた。すると、それを見た沙希が怒鳴った。

「何笑ってんのよ！」

クラインは慌てて表情を平素に戻して深々と頭を下げた。

「は、ははっ！ 申し訳御座いません！」

クラインは謝罪したものの、沙希は彼が笑ったことに激昂していた。そして椅子から立ち上がって彼を叱り付けた。

「あのね、もう少し人間から色々学ぶべきよ！？ 暗い部屋でこんなグロイもの食べてるから、そんな物騒な考え方ばかりになっちゃうんだわ！ そもそも、健全な精神というものは――」

沙希は大声で滔々と語った。クラインは頭を下げたままその熱弁を聞いていたが、その話の半分以上は彼ら魔族にとつて到底理解できかねるものだった。

そんな彼を一通り叱りつけ、沙希はふう、と一息ついて言った。

「もう、今日は朝食はいらないわ。早くこれ下げて！」

それを聞いたクラインは給仕係を呼びつけ、その皿を下げさせた。

沙希は高ぶった自分の感情を落ち着かせようとテーブルに両肘を付き、俯いてゆつくりと目を閉じた。視界が暗くなると同時に、その思考が徐々にぼやけていくように感じた

沙希は目を開けた。

天井が見えた。

彼女はいつの間にか横になっており、窓から差し込む陽光に天井のシーリングライトがオレンジ色に照らされていた。

彼女は起き上がり、部屋を見渡した。自分の部屋 就寝前と同様の光景が広がっていた。

部屋のドアの外から母親の声が響いた。

「沙希、早く起きないと学校に遅れるわよ！」

沙希は目を擦り、そして頭をぼりぼりと掻きながら呟いた。

「変な夢見ちゃった……。美奈のこと笑えないな、こりゃ」

翌朝、カンパレア王国より遙か北の魔族の城で、魔族の女王サキユバスは朝食の席に着いた。

給仕係の泥の塊たちが並べた料理を見て、彼女は目を丸くした。

「む？ 今朝の朝食は一風変わっておるな……？」

クラインが答えた。

「はい。昨日のご指示通りに作らしました」

「指示……？ 記憶に無いが……まあ、ひとつ食してみようか」

彼女は神妙な顔つきで皿に乗った黄色い塊にフォークを伸ばし、

それを口に放り入れた。すると、瞬く間にその表情が緩んだ。

「ほう、面白い味じゃのう。これは何という料理じゃ？」

クラインは料理長から預かっていた手元のメモ書きを読み上げた。
「えー、と、”きのこの玉子炒め”というもののようです。鶏の卵
ですな」

「ほう、鶏の卵とは斯様に美味なものであったとは思わぬ発見じ
や。こちらは何じゃ？」

彼女は皿の上の細長い筒状の物体を指差して問いかけた。

「えー、人間どもが豚の肉から作る”ソーセージ”というものを茹
でたものようですな」

それを聞いたサキユバスの表情が少し強張った。

「ほう、人間どもの料理、と？」

一瞬フォークを持つ手を止めたサキユバスだったが、その美味し
そうな香りがぷんと鼻につき、そのソーセージにフォークを突き刺
して興味深そうに眺めた。

「まあ、一興じゃ。食べてみるか」

それを口に入れてみると、パリツという音と共に口の中でソーセ
ージの皮が弾け、肉汁がじんわりと口腔に広がった。彼女の頬がほ
ころんだ。

「ほう、これは面白い。人間どもの食文化はなかなかあなどれん
ようじゃな。このパンも実に旨い」

ライ麦で作られたパンをほおばりながら、彼女はじつに嬉しそう
な笑顔を浮かべた。

そして朝食を食べ終わり、彼女は満足そうに言った。

「ふむ、料理長には褒美をとらせねばならんな。呼んで参れ！

人間どもの料理がこれほど旨いなどと、わらわには考えも及ばな
かった。実に素晴らしい発想じゃ！」

「はあ……」

その言葉を聞き、クラインはゆっくりと厨房へ向かった。

その道中、一晩明けた女王の態度の差に妙な違和感を感じて首を傾げた。

沙希、魔城に立つ（後書き）

沙希は美奈よりも幾分か賢く、物怖じしない性格です。

今後もこの調子でガンガン魔族の皆さんを引っ張っていかせよう
と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0458t/>

居眠り剣士は女子高生

2011年5月26日06時34分発行